

赤軍

No. 4

綱領確立のために (I)

— 過渡期世界とプロレタリアー党 —

第一章 現代革命論への方法的視点

第二章 世界史的階級闘争の段階としての過渡期世界、
その二つの歴史的普遍性

第三章 現代帝国主義—現代帝国主義国家

第四章 過渡期世界—その歴史的展開

共産主義者同盟赤軍派

☆なし崩しファシズム—侵略—反革命戦争との闘いを世界革命戦争へ！

☆世界同時革命！

☆世界党—世界赤軍—世界革命戦線を創出せよ！

第一章 現代革命論—の方法的視点

第一節 革命論獲得の諸前提と接近の方法

歴史は階級闘争の歴史で資本主義の成立以来、共産主義時代に到達する世界の全歴史的過程は、この階級闘争、永続的、非和解的なブルジョアジーとプロレタリアートの二大階級の闘争の歴史であり、その実践的な場であることを明白にしている。

我々、プロレタリアは、ブルジョアジーを打倒し、共産主義の実現へ向け、世界革命を闘いとらんとするのであるが、ブルジョアジーとプロレタリアートの闘争に於いて、この闘争は革命戦争に打ち勝つには、ブルジョアジーが彼らの権力と統司令部をもち、戦争に備えるのに対し、我々プロレタリアもこの巨大な、歴史的な、世界革命戦争勝利へ向け我々自らの、個々の戦闘陣型と統司令部プロレタリア党を持たねばならない。ブルジョアジーの統司令部と彼らの権力を基軸とする戦闘陣型に対し、プロレタリアとその党がこれを打ち破り、革命戦争を胜利的に展開していく為には、プロレタリアート個々の陣型とその統司令部(プロレタリア党)を形成しなければならぬ。かつプロレタリアと党は、自らをブルジョアジーの打倒と共産主義の実現に向けて、より深く、固く結合してゆかねばならぬ。又、自らの統司令部を強化し、拡大し、ブルジョアジーから防衛してゆかねばならぬ。

これらのブルジョアジーに対するプロレタリアートの戦闘の展開と不滅の勝利を導くものがマルクス・レーニン主義であり、その総括体としての革命論は、普通、一般に、以下のように述べられ、獲得されるし、獲得されねばならない。

第一に、「ブルジョアジーとプロレタリアートの闘争の世界史的段階が如何なる性格のものかを、かつ、これと一体としてあるブルジョアジーとプロレタリアートが如何なる闘争関係にあるか」を世界史的、歴史的に指定することである。ここから世界史的な一歴史段階の普遍的、基本的な、プロレタリアー

トの革命の在り方を指定し、実践的な共産主義とその運動の成立と展開の在り方を導き出すのである。これらは主に、唯物弁証法を基軸とする唯物史観とマルクス主義経済学とを、かかる意味での階級闘争史観と階級闘争関係として把え直しここから革命論現に取りかからなくてはならぬ。

もともと革命論は、このブルジョアジーとプロレタリアートの間の唯物弁証法的な、歴史的な闘争関係の確認及び、これと一体をなすブルジョアジー打倒の戦争の勝利をめざす能動的な実践的歴史観を、即ち、唯物弁証法—唯物史観—マルクス主義経済学を前提として与えられるのである。この唯物弁証法的な階級闘争の歴史的な法則関係を貫く前提とは、資本主義時代以降に於いては、ブルジョアジーとプロレタリアートが、世界市場成立と一体をなす国民経済を基軸とする市民社会(ブルジョア社会)の内、資本制の生産過程—流通過程—消費過程を基軸とする分業諸関係を基軸にもつ二律背反的關係の土俵の内、闘争することである。更に、この二律背反的關係の特質は、ブルジョアジーが世界市場を前提としつつも、これは国民経済—市民社会の総括としての国家を媒介とした世界性でしかありえない(その限りで、ブルジョアジーは経済的範ちゅうの人格的表現としては世界的でありながら、経済—政治の実践的総体に於いては一国的であり、それは別の側面、即ち支配階級としてあることを意味する)という限界性を有するのに対して、プロレタリアートは国民経済が世界市場成立と一体となって成立し、かつ、世界市場を前提として成立することに於いて、もともとその物的姿態としての労働力商品が世界的であり、世界性をもつことに於いても自由で普遍的で、世界的であるという存在する。にもかかわらず、資本制生産とその諸関係が国民経済に基礎を置き、かつ市民社会がブルジョア国家権力に総括されることに於いて、プロレタリアートは、その別の側面として振制的に国民的・民族的であり、同時にそれ故に、被支配的階級なのである。

プロレタリア世界革命の歴史的、経済的基礎は以下である。母体たる資本制生産から形成される過剰な生産力が、自らの生成そのものである国民経済の生産過程と生産・流通諸関係を、及び私有財産制度を維持する国家とその権力に総括される上部構造の諸関係を越え自律的に発展し、これらを自律的に打ち壊わさんとする要求をもつていくのに対して、ブルジョアジーは自らの支配階級

としての存立の基礎を国民経済—私有財産制度—これを総括する国家権力に置くが故に、かかる資本の世界性に対して擬制的にしか応えられない。それ故、ブルジョアは、資本—資本制生産—過剰生産力の要求に対して、擬制的に世界的たらんとし、一時的に解決せんとする。即ち、他国の国民経済と国家への侵略を通じた世界市場の占有と世界の政治的支配を、プロレタリアートの世界性を一層擬制的、一国的・民族的・国民的枠内におしとどめることを、この両者を一体的に貫徹し、世界支配民族(国家)たらんとするのである。かかる一時的・擬制的解決こそが反革命なのである。かかる資本と資本制生産関係との根本的矛盾の擬制的な外延的世界化(経済的、政治的その他民族、他階級抑圧、その最大なものとしての植民地化、領土占有)が生起する矛盾は、これら諸矛盾に対して、プロレタリアートをその擬制的な国民性、民族性、被支配性を越えたその普遍的な世界的姿として結合された世界プロレタリアートとして登場させ、成長させる。

この意味に於て、プロレタリアとその党は、ブルジョアととの弁証法的な闘争関係に於ける勝利的方向を、常に世界的に表現するようにしない限り、自らの革命を改変し展開することはできないのである。それ故、プロレタリア革命はただ唯一の世界革命である。(「プロレタリア革命は一挙的・同時的な世界革命である」マルクスD・I)また、社会主義・共産主義も、ただ世界的存在としてのみ成長するのである。

第二に、かかる唯物弁証法—唯物史観—マルクス経済学の領域に於て獲得された二大階級の闘争関係の世界史的段階・性格、プロレタリア革命と社会主義・共産主義の實踐の成長の在り方を踏えた上で、ある一定の特定の段階にある現実的なブルジョアとプロレタリアートの関係、これに媒介されたブルジョアとプロレタリアートの基本的動向を確定し、プロレタリアートの歴史的实践的な、かつ現実的な総体的位置を確定することである。

かかる現実的實踐的領域は、歴史的・実態的な資本主義とこれを土台においた資本主義国家の分析を通してのみ初めて与えられるのである。何故なら、唯物弁証法—唯物史観—マルクス経済学の領域に於て培われ、措定された世界史の實踐把握は、根本的に普遍的ではあるが、より歴史的・實踐的・現実的な階級闘争に於いては、必要とされるものは、これを前提としこ

現)は、かかる前提と接近の方法をもつて開かれるとき、実践的な共産主義(運動のそれ)として把握され、階級形成—党形成(対象変革・党・党主体変革)として実現される過程として把握されるのである。かくして我々は、初めてマルクスの「共産主義とは、永遠の理想や基準ではなく、現実の實踐である」(D・I)を把握し直すことができるからである。共産主義とは、実在としてプロレタリア人民が、資本主義の否定的矛盾の契機—階級闘争に於いて、歴史的(過程的)場所的實踐の弁証法を通して展開し続けプロレタリアとその党が世界プロレタリアートに成長し続ける過程として把握され、実践されるのである。

第二節 過渡期世界に於ける革命論獲得の諸前提とその方法
ところで、我々、プロレタリア人民が生きて、生活し闘争している世界は過渡期世界である。一般的、歴史的には、この過渡期世界は一九一七年ロシア革命の成立(？)を世界史的画期として開始され、帝国主義への移行の世界史的、世界的な過渡期と規定されるのである。

かかる世界史的、世界的な移行の過渡期を「如何に、主体的・実践的に、プロレタリア世界革命を通して移行せしめ、社会主義—共産主義を準備するのか」をめぐって、世界革命論の獲得とその実践がめざされながらもその接近の諸前提と方法の混乱と誤謬故に、かつこれと一体をなす、その内実の混乱と誤謬故に、過去三度プロレタリア人民は大敗北を喫し、血の海に溺れせしめ、この世界プロレタリアと世界党に於ける歴史的敗北の主體的根源は、当のブルジョアとその党がまさに生き闘争している過渡期世界そのものの対象化の前提と対象化の方法との混乱にあり、かつこれと一体をなす革命論の誤謬と混乱にあったことは明白である。まさにそれ故に、我々はこれへの解答を鋭く問いつめられつつあるのだ。

我々は過渡期世界に於ける革命論(現代革命論)の獲得へ向けて、革命論獲得の前提内容と方法を第一節で叙述した如く、(i)唯物史観の領域(現実形態的分析、(ii)現状分析として設定し、如何に過渡期世界であるとはいえ、革命論を獲得してゆくことに於けるこの前提内容と方法をいさかも修正しはしない。だが、かかる「(i)唯物史観(階級闘争史観)の領域に於ける過渡期世界の措

れと一体をなす、まさに一定の特定の段階にある「ブルジョアとプロレタリアートとの関係」にこれに媒介されたブルジョアとプロレタリアートの基本的・基調的動向の確定「世界プロレタリアートの歴史論、実践的な、かつ実態的な総体的位置」を獲得することである。

第三にこれらを前提にして、ある一定の特定の(小)歴史的、場所的総体として分析しうるし味方の総体を把握し、第一に措定された革命と社会主義・共産主義の「成長の在り方」に向けて、プロレタリアとその党は、特定の歴史的场所から現実総体として実践的共産主義の革命運動を登場させ、これに接近しうる基礎を与えられるのである。この接近の内容こそが狭義の意味での革命論—戦略—戦術論である。

以上から共産主義への解放の事業(最大限綱領)は次のようにまとめられる。(i)唯物弁証法・史的唯物論—マルクス経済学の次元、即ち、世界史的段階に於けるブルジョアとプロレタリアートとの闘争、その関係の性格、革命と社会主義・共産主義の成長の歴史の在り方の措定—これは大筋に於て史的現実的な資本主義と資本主義国家の分析を通して「ブルジョアとプロレタリアートとの闘争、その関係の性格、革命と社会主義・共産主義の成長の歴史の在り方の措定—これは大筋に於て史的唯物論の領域である。(ii)より特定の歴史的现实的な資本主義と資本主義国家の分析を通して「ブルジョアとプロレタリアートとの関係」に「ブルジョアとプロレタリアートの対応の在り方」の措定—我々はこの領域を現実形態的分析と呼ぼう。(iii)世界史的段階(大歴史的)の特定のその歴史段階(中歴史)のそのまた特定の小歴史段階の、即ちかかる三重的に把握される総体としての特定の場所に於ける「ブルジョアとプロレタリアートの攻撃の在り方」—プロレタリアートの対応の在り方の措定—現状分析といつてもさしつかえない。(iv)これらの措定の上に立つて、歴史的・場所的な「ブルジョアとプロレタリアート」を媒介として世界史的段階の革命と共産主義の在り方(普遍性)へ接近する内実たる革命論(戦略—戦術)の獲得。この四点として、革命論は革命論接近の諸前提と接近の方法をもつのである。

勿論、実践的には、頭の中では、この(i)(ii)(iii)は一体であり、総体的ではあるが叙述の仕方(整理の方法)としてはこうなるのである。

共産主義への人類の解放という、真に偉大で、壮大な事業(最大限綱領)を定む(現代帝国主義論と現代帝国主義国と世界プロレタリアートを通して、過渡期世界の現実形態的措定(i)特定の歴史的场所的階級闘争の措定としての現状分析、そしてそこから革命論(戦略—戦術)の措定(ii)の接近の前提内容と方法は、マルクス・レーニン主義の原則を踏えつつ、これをその前提と方法論的確定まで含んで、根底的、実践的に把握し、創造的に、発展せしめない限り、かかる革命論獲得の前提と方法は、現実に革命導入に適用しえなくなつたか、かかと思われ、かかる原則的前提と方法は、ふみはずされ修正され、革命論も又修正されるのである。

④過渡期世界に於ては唯物弁証法—史的唯物論—経済学の次元では、ますます階級闘争は一地域のブルジョアが「支配」階級として登場し、世界プロレタリアートが現実形態的に世界プロレタリアートとして登場し、世界革命戦争の性格に深化、具体化し、階級闘争の弁証法は戦争の弁証法として深め発展されねばならなくなっている。かつ史的唯物論は過去のマルクスの「宣言」—ゴータ綱領の次元では一般的で或いは、レーニンの「国家と革命」の「国家死滅の経済的基礎」のみでは一面的で(誤りすら)ある。また、マルクス主義経済学は、過渡期社会の生産力の発展に生産関係の問題として発展させられねばならぬ。過渡期社会の現出は、マルクス・レーニン主義を最も鋭く試練にかけている。これ等のマルクス・レーニン主義の発展止揚の問題はすべてブルジョアとプロレタリアートの新たな特殊な世界史的段階の階級闘争の関係の性格・形態の解明を問ひ、この意味において、資本主義時代から社会主義・共産主義時代の移行の過渡期特殊な史的唯物論に集中される領域の根底的深化と止揚が問われている。

⑤又、ロシア革命成立を契機として、世界革命から延命した帝国主義は、帝国主義の最終段階とはいえ、その独占を高度化し、腐朽と寄生性を増大せしめ、一層発達し、これに現代帝国主義国家の「新たな歴史的経済的役割」が加わることよって、正に経済・政治—体系的現代帝国主義として発達している。これは単純にレーニン帝国主義をあてはめることによつてのみでは解明されない。かかる現代帝国主義を基礎としつつ現代帝国主義国家は、過渡期世界の世界史的ブルジョアの世界的攻防関係の深化に従つて、その本質的性格と役割を国家の新しい階級的な政治、経済的役割りとして発展させ現代なもの

争の到達段階、性格を規定し、第三章に於て、現代帝國主義と現代帝國主義國家、特殊に過渡期社會を分析し、現実形態の過渡期世界の階級闘争を把え、第四章において、現状分析的に歴史的场所性をもつ階級闘争を分析し、ここに於て、「過渡期世界・プロレタリア・党」は、総体として把えられ、第五章において、革命論(戦略・戦術)を展開するのである。

以上の過渡期世界の革命論指定の結論的「前提と方法」を踏えた上で、この「前提・方法」上における二つの誤謬について指摘し、第一章の整理の素材としておこう。

その第一は、スターリン・ブハーリン或いは第二次帝國主義戦争以降その集約体としてのフルンチョフ等の考え方に典型を置く流れである。又、その寄生の種種としての革共同(とりわけ革マル・黒寛)である。毛沢東及び中国共産党もこの流れである。だが、彼らは、経験主義、適切なプラグマチズムを通しながら変革し得る可能性をもっていると思う。

第一、この最も主要な誤謬は、史的唯物論次元の世界史的階級闘争の到達段階に、にもかかわらず、現代帝國主義と現代帝國主義國家を媒介にした支配階級としてのブルジョアジーによって制約され、貫徹されている、区別と統一の關係を見抜けないのである。これは、勿論支配階級であるブルジョアジーにプロレタリアートが支配され、制約されながらも、現実形態の過渡期世界の階級闘争に、能動的攻勢的自然発生性を発現していることから、史的唯物論上の階級闘争の到達段階が、直線的に貫徹しているかの如く見え、思えるのであることに根拠を置いている。ブルジョアジーの支配・プロレタリアートの被支配關係を抜落し、無媒介に史的唯物論上の階級闘争の到達段階を、現実形態的階級闘争に導入し把えを固定化してしまふのである。

第二にかかると根本的誤謬は、史的唯物論、即ち、階級闘争史観の修正が始まり、史的唯物論は放棄される。過渡期社會は階級闘争の存在しない社會として把えられ、この特殊な「第三範疇」とも言える次元での「過渡期社會から、社會主義、共産主義」への移行が過程されると考へるのである。この第三範疇は階級社會のない「社會」國家」として「國家」「体制」として把えられ、ソ連スターリニストは、今「全人民の國家の成立」社會主義の開始」をがなっているのである。更に、ここから「体制間矛盾論」が引き出される。まさに、史

經濟過程を自由にする」なる人民資本主義論に迄變質するのである。或いは資本の過剰・不均等発展が否定され「米資本主義を心臓とする世界資本主義」(岩田)等が生れるのである。我々は現代資本主義は過渡期世界の世界史的階級闘争の到達段階、性格に前提づけられつつ延命した帝國主義が独占を高度化し、圧倒的な過剰生産力を抱えつつ、腐朽・寄生性を増大し停滞する事態を經濟的根拠にし、かつこれを放置すれば、恐慌を媒介するか否かは別に世界プロレタリアートの高次の自然発生性が爆発することを政治的根拠にし、國家が新しい經濟的役割(對外的には、國家資本輸出、国有化、社會保障、労働政策、だがその中心は軍事産業の國家の育成を中心としてこれを呼び水としての經濟總体の軍事經濟化である)が要求され、この新しい役割を媒介し恐れの危機をくり返し、結局全世界の侵略、抑圧、反革命戦争へと向わざるを得ない最終段階に到達した帝國主義と考へる。又現代帝國主義國家は、同様に、過渡期世界の世界史的到達段階に規定され、かかる現代帝國主義を經濟的土台に成立し、それ故に現実の世界史的プロレタリアートの能動的・攻撃性が、現代帝國主義の停滞・腐朽・寄生性の増大に媒介され、現実形態的に発現されるのに対し、國家の役割を政治的經濟的に一層強め、資本の法則の下に、不断にこの世界プロレタリアートを反革命しつつ、侵略、抑圧し反革命戦争に動員する階級の役割を持つていと考へられる。それ故、我々は、これをブルジョア独裁として本質的に把えつつも、帝國主義の最終小段階に於て、形態変化の問題として、侵略、抑圧し反革命戦争を最大にして、かつ集約的任務をもつ「なし崩しのファシズム体制」として規定するのである。

だが修正主義は、ブルジョアの世界プロレタリアートに対して妥協しながら、反革命する対応や、帝國主義國家間の協力關係(國獨資政策・福祉政策)の「革命同盟」は最大の集約的(な)もののみをみて、國家の二重性(佐藤理論)、民族主義、社會福祉國家論(を修正)するのである。或いは教条的に「反動と暴力」の帝國主義段階の基本命題を合唱するのみである。

第四に、革共同一派(主に黒寛等革マル派)の反帝反スタ論の基底認識にみられるものである。これとの關係にあるトニークリフ、対島忠行等である。彼らも現代修正主義・スターリニズムと同様に、④過渡期世界の階級闘争とプロレタリアートの世界史的到達段階を、現実形態的過渡期世界の階級闘争を

的唯物論上の階級闘争の到達段階と現実形態的階級闘争がたぶらされ、等置されてしまつてゐる。

③この「第三範疇」の社會のプロレタリアと「党」は現実形態的な過渡期世界とその階級闘争に内的に制約され、規制されていないと考へるのである。外的な反革命と、国内階級危機(彼等にとっては単なる「政治危機」)は、ただ、自らの主観的力量の問題として解決されると考へるのである。

ここから世界階級闘争の主観的指導(全くの恣意)を引き回し、或る時は、初期ブハーリン時の世界革命戦争の主張、コミンテルン第六回大会の「全般的危機」第三期論「攻勢の理論」そして、戦後冷戦、そして再び開始されつつある冷戦II世界革命戦争の疎外された形態としての体制間戦争等の一連の軍事力学的極左冒險路線、他方でコミンテルン第二回大会の「左翼小児病」、独ソ不可侵条約、一転しての「反ファシズム戦争」そして戦後のフルンチョフ「平和共存路線」等の軍事力学的右翼日和見主義路線の原則をもたないジグザグとなるのである。)が開始され、国内階級闘争指導も又、主観的なものに転落し、第三範疇に於る過渡期社會建設の困難性は、その主観的指導の解明に向うのでなく、純經濟生産力の發展の問題に帰着させられてしまふ。これこそが、ネップ政策の無原則性―その後の工業化の輕蔑―農民の暴力的解体・強硬的国有化・工業化―そしてこれらのプロレタリア人民の犠牲の上に築かれた一定の生産力の發展でもつて「社會主義經濟の成立」を楨杆にしての「資本主義との經濟競争」ここからの必然的險、べいとしての「自由化路線」と「利潤導入方式」等、この総括体としてズブズブの經濟主義の「一國社會主義社會建設路線」が指定され根拠づけられているのである。第三にここから現代帝國主義、現代帝國主義國家の過渡期世界に於る新たな發展と國家の独自の政治的―經濟的役割の問題が把えられなくなるのである。

それ故、階級闘争の世界史的到達段階と現実形態的プロレタリアートの矛盾とが区別され、統一されなくなるのである。

ここからして現代帝國主義は、レーニン帝國主義そのままであつたり、直接の単純な延長であつたりし、そのアンチとして「客觀的經濟過程を、階級闘争が直線的に踏みこえる」把握が生まれ、これを基底に独占の高度化、資本II生産力の過剰が生産關係をかえるという「段階論」がもちこまれ、或いは「國家が二重性し、直線的にダブルさせてしまつてゐる。それ故、過渡期社會のプロレタリアと党は一定の歴史的生産力の上に規定された第三範疇のうちとして主観的存在として把握されている。

彼等の過渡期世界は、「帝國主義とスターリニズムの相互浸透と相互反発」(革マル)「帝國主義とスターリニ主義の世界相互分割」(中核)に表現されている如く、何んの内的連関も機軸性もなく、無媒介に主観的政治に於て、結合しているのみである。③スターリニズムがプロレタリアと党の敗北とその變質を合理化し、正当化するのに対して、「原則に従へばうまくやれるのに、原則を裏切り、放棄した」と弾劾することに相異を見出し過ぎて過ぎない。

④そして、この批判―被批判者相互が純粹主観的基準しか持ちえていないが故に、批判者はその批判を通じて、逆にマルクス主義自体の普遍性の批判へと質的形態移行し、ブルジョアのなみに變質してゆく。一切の價值觀の崩壊としての現代無政府主義が論理上は誕生するのである。これは一歩突き進み、トニークリフ、対島から、バックカードに致り、「ソ連官俸制國家資本主義論」「ソ連赤色帝國主義論」として反革命に転化するのであった。

⑤その第二は、旧BUNDや過去の反帝派(主に青解)や現在のBUND中央派や、中大GRPも含み、トロツキーに根源をおく流れである。我々の過去も又そうであつた。この流れの根本的考え方は以下である。④帝國主義とブルジョアジーにプロレタリアートを規制されていること、過渡期社會の矛盾も、根本的には、帝國主義に規定されていること、スターリニ主義の發生もここに起因していること。⑥帝國主義打倒を世界革命の軸に置くこと。この打倒を通してスターリニズムも克服しなければならぬこと。⑦かかる観点は全く正しい原則的観点である。だが過渡期世界の世界史的位置や、現実形態的位置の区別と統一の問題が不鮮明で漠然としており、又その解明の困難性故に、この解明を放棄し、原則のみにとどまり、教条主義に転落するか、絶えず、この対極に修正主義を生みださずにはおかないのである。

或いは、自らの歴史的场所性の特殊性、個別性を普遍化してしまふ危機を内包しているのである。⑧だが原則を踏えた解明の模索は、帝國主義の分析の深化―現代帝國主義・國家論争を経て、過渡期社會分析を独自媒介に、不可避に、①唯物弁証法―史的唯物論―マルクス主義經濟學の深化を経て、過渡期世

界の唯物史観的把握と現実形態的把握を区別して統一して把握、②の上に立って現代帝国主義とその国家の解明に向かわざるを得ないし、③それは結局M・L主義の止揚発展、とりわけ、レーニンの革命論(党建設論迄、含む)の根底的止揚発展へと向かわない限り、自らを教条主義として過渡期世界の新たなターニング点へと自らを変質せしめてゆくのである。

これ等の止揚の過程は、種々あり、又、その止揚の挫折過程もそうであり、今、現在の中央派は、レーニン主義の教条化と他方での「過渡期世界論」を媒介にしないまま、スターリン主義を克服しようとしたが故に、直線的に、観念的にレーニン批判に向かい、帝国主義段階の根本的前提であり、マルクス主義の止揚発展された核心「何をなすべきか」に集中される、前衛自身の自然成長性を克服する前衛党組織論を否定、先組掃り、前衛個人→大衆になった。今中央派も又、「過渡期世界論」を媒介にしないが故に、青解の道を二番せんじ的に辿り始めたのであった。

第二章 世界史的階級闘争の段階としての過渡期世界、その二つの歴史の普遍性

第一節 歴史の普遍性の基本テーゼについて

第一章において明らかにした如く、過渡期世界の革命論の獲得は、まず唯物史観の次元における階級闘争の段階、性格の分析から始めなければならぬ。過渡期世界が、全面的な資本主義時代から世界プロ独を結節点とする世界社会主義→世界共産主義の時代への過渡であり、移行期である以上、この階級闘争の世界史的普遍性は、まず第一に資本主義時代から、如何なる質的形態転換を行ない、如何なる段階に到達したのか、この移行と確定された段階の性格は何か。

第二に、この第一の世界史的普遍性は現実形態的過渡期世界の階級闘争に於て、如何なる性格形態で存在し、媒介的に発現するのか。

第三に、以上(一)からして、世界プロレタリアートは如何なる歴史的成长の在り方を行なうのか。

の三つの連関に於て個々に規定する必要がある。

我々は第一章に於て、プロレタリアートが本来世界的であり、プロレタリア革命はただ唯一世界プロレタリア革命であり、社会主義・共産主義も又、世界社会主義世界共産主義としてしか有り得ないことは、確認してきた。

それでは、過渡期世界の階級闘争の歴史の普遍性をまず、三つの基本テーゼにまとめこれを歴史的論理的に説明することにしよう。

第一テーゼ

支配階級としてのブルジョアジーはその矛盾を解決することなく過渡期世界に突入し、その矛盾を一層深めるのに対して、被支配階級としてのプロレタリアートは、過渡期世界突入を契機に世界武装プロレタリアートに成熟・到達し、ブルジョアジーとの闘争を通じ、現実形態的に自己の矛盾の止揚過程を開始した。

第二テーゼ

帝国主義の運動に媒介され、ブルジョアジーはいぜんとして支配階級であり、プロレタリアートは被支配階級であり、二大階級の基本関係は変わらないが、にも拘わらず、ブルジョアジーは、この闘争関係に於て、受動的防衛的であり、プロレタリアートは能動的攻撃的であり、両者の制約関係が転倒過程に入ったこと。

即ち「ブルジョアジーの制約→プロの被制約→プロの逆制約」の攻防関係に於いて、この逆制約が、世界武装プロレタリアートへの成熟・到達を通じ、以前の消極的受動的なものから、能動的攻撃的のものに転化したこと。勿論、この事柄は、第一の歴史の普遍性が、現実形態的に如何に発現展開するか結論の内容であって、これは現実形態的に現代資本主義、現代帝国主義国家を媒介に歴史的具体的に述べられねばならない。

第三テーゼ

かかる階級闘争は、より高次な能動的階級闘争として、世界武装プロレタリアートをして①個別国家、プロットの個別性・歴史性を越え、世界革命を、世界プロ独→世界社会主義・世界共産主義(階級と類の解放)に向け、単一の、永続的な、論理的、時間的に同時なものとして成長、発展せしめる。②この革命の形態は、世界革命戦争である。この世界革命戦争は、歴史的、実践的に世界プロ独、世界社会主義・世界共産主義を準備し、真の人類史の開始の過程である。③この革命と形態は、世界武装プロレタリアートにとって唯一「世界党→世界赤軍、世界革命戦線」としての団結と矛盾の展開様式を与えられて成長発展するのである。

以上三つのテーゼにまとめられる。

第二節 世界武装プロレタリアートへの到達・成熟——第二テーゼについて

へい、ロシア革命の成立とプロレタリアートの世界武装プロレタリアートへの到達・成熟

①ロシア革命を通して、ブルジョアジーは自己の普遍的矛盾を一層深め、プロレタリアートとしての普遍性は、全面的資本主義時代、過渡期世界・世界社

会主義として世界史的に歴史区分される、歴史性の次元での現実形態性に於いて、明らかに、世界武装プロレタリアートへ各国のプロレタリアは、自らの矛盾の止揚の契機を、歴史的に具体化し、形態転換し、質的に飛躍した。

世界プロレタリアートは、世界的に結合し、共産主義的社会性を強め、その階級性の集中としての武装を強めたのであった。

かかる階級闘争の世界史的段階と性格をロシア革命を、媒介とする質的形態転換の問題として、主に世界プロレタリアートの現実形態的世界武装プロレタリアートの成長の面に力点をおいて、歴史的に把握してみよう。

①資本主義の産業資本主義としての成立過程に於て、ブルジョアジーは絶対王制をうちやぶり支配階級へと成長し、資本制生産と、その分業諸関係を私有財産制度として確立し、ブルジョア国家とブルジョア独裁権力を樹立した。近代

的工場制度は、確立過程に向った。

英ブルジョアジーは自らを世界の工場として世界市場と世界に君臨し、他の産業資本主義とブルジョアジーはそれぞれの歴史性に従いこれに習った。プロレタリアートは、未だ自らの組織的確立をなし得ず、その党も持たず、「貧民」として存在し、「産業資本主義→ブルジョア社会→ブルジョア権力」樹立の過程に於けるブルジョア革命に、急進民主主義的要求を掲げ、ブルジョアジーの同盟軍として、最左翼として位置し、歴史的に、ブルジョアジーに利用される存在であった。ブルジョア革命を完遂したブルジョアジーは産業資本主義の発展過程で、この貧民を工場プロレタリアへと大規模に解体・再編成したのであった。だが産業資本相互の無政府的自由競争を通じた発展は、プロレタリアートをした、ブルジョアジーの奴隸として隷属せしめた。プロレタリアートは反抗を開始し、その初期に於て、機械打ち壊し等の無政府的反抗に走りながらも、この敗北から、自らをブルジョアジーに対して科学的をもって、組織と団結を通じた革命の道を進むことを学んだのであった。このプロレタリアに組織と団結の道を通じた革命を教えた前衛こそがマルクス・エンゲルスであり、その無政府性との闘争の実態こそが、M・Eのバクティンとの闘争であり、その組織的団結の集中的表現こそが第一インテラであった。プロレタリアは、この前衛と第一インテラに導かれつつ、政治的権利の獲得と自らの経済要求を獲得する武器として、労働組合や生活共同組合等を獲得していったのであった。産

業資本主義段階に於けるブルジョアジーとの闘争を通じて、プロレタリアートの闘争は歴史的には、貧民から近代プロレタリアートとして、組織的団結と自らの党を獲得する「組織への道」を歩む成熟過程のプロレタリアートとしてあった。

だが産業資本主義から帝国主義の成長転化過程と、帝国主義の段階にあって、ブルジョアジーは、プロレタリアートを抑圧しつつ、植民地領有に奔走し、プロレタリアートをこの分割と再分割戦に動員すべく、超過利益の一部を分け与え、一部のプロレタリアートを労働貴族化せしめ、ブルジョア民主主義と一定の経済的利益をわずかにプロレタリアートに与え、ブルジョア民主主義体制にたぎりとめんとしたのであった。プロレタリアートは組織への道から、組織を体制として与えられたのであった。近代プロレタリアートとして組織的自己を確立した。だがこれは新たな本格的な矛盾の開始でもあった。一八七〇年から20C初頭に至る過剰商品からの大恐慌と列強植民地領有戦は、プロレタリアート人民をして戦争と革命の時代に突入せしめ、M・Eと第一インターはこれに忍びることが出来なかつた。この敗北の開始であり、最大のそのことが「パリ・コムニオン」であった。これはブルジョアジーの排外主義政治と代議制民主主義—近代的労働組合制度確立の攻勢に対し、プロレタリアートが「戦争と民族問題」を環にした世界革命とその党の建設に挫折したことを意味する。そして、これと一体なものであるとして、プロレタリアと第二インターが、初期の革命的組織への道へと変質せしめ、これを集約して社会排外主義の傾向へと組織を持つが故に変質していったことを意味するものであった。だが産業資本主義の帝国主義への移行期から帝国主義の確立期の世界市場分割戦—再分割戦、これを土台とした列強の他民族抑圧、帝国主義間強盗戦争はプロレタリアート(II Pr)をして、世界的に単一のものに結びつけ、かつ帝国主義のブルジョア民主主義制度と、それを総括する国家と組合等の階級性格を理解せしめる契機を与えその本来の世界Prとしての、意識性と団結を与えていたのである。Prは帝国主義とブルジョアジーの戦争、反動、暴力を通じて、自らを団結させ、自らを理解していったのである。

このPrの産業資本主義の帝国主義への成長転化過程と、帝国主義段階の、

ルシエウイキに於いて不可避に発展止揚されなければならなかつたのだ。後者については前述したので、前者について若干説明して置こう。「戦争と民族・民主主義」については、一八七〇年を前後して、それ以降の産業資本主義から帝国主義への移行期と帝国主義段階に於いて、階級闘争の核心的な実践上の問題であった。経済闘争を巡るプロレタリアートの改良主義との闘いは、階級闘争に於ける根本問題であるが、産業資本主義から帝国主義への移行期、そして帝国主義段階に於いて、世界市場の分割と再分割戦を通して、超過利潤の一部労働者階級への分配、この構造を通じて、労働者階級の中に、戦争主義、民族主義が経済主義と結合し、社会排外主義—社会改良主義が蔓延せざるを得なかつたこと。

これらに対してベルンシュタイン、ヒルファアディング、カウツキー等の第二インターの主要な前衛—理論家が、社会排外主義—社会改良主義が何故に登場したのかを根本的に明きらかにし得ず、自らもが社会排外主義へ転落して行った。これに対してレーニンと、ボルシェウイキ党はこの根拠を資本主義の帝国主義への移行と帝国主義段階の一つの特徴として明きらかにした。そこから、この超過利潤はほんの一部に分配されるだけであり、大部分の圧倒的労働者には全く無関係であり同時にこの超過利潤の根拠は、実は帝主義の根本的運動から起こるところの世界市場の分割—再分割戦にあり、且つこの分割—再分割戦は、不可避に帝国主義間強盗戦争を生み出し、労働者と人民に何の利益もたらさないばかりか、労働者層のありとあらゆる災難をもたらすことを、更に、この帝国主義間強盗戦争の中で、プロレタリアは世界的に結合し、戦争の過程でプロレタリア世界革命を完成し得ることを「帝国主義論」に於いて、「帝国主義戦争を内乱へ」として立証したのであった。これを土台に「戦争・民族・民主主義—経済問題」に革命的総括を行なったのである。かくして、マルクス・レーニン主義によって武装されたボルシェウイキ党は、ロシア革命を勝利的に導き、この地上に初めて支配階級として武装したプロレタリアートをロシアに登場させたのであった。

「II Pr」支配階級としてのロシア武装プロレタリアートとレーニン主義—武装プロレタリアートの新たな歴史的に高度な矛盾—
ロシア革命を媒介にして、ロシアプロレタリアートの被支配階級から支配階

矛盾の止揚の道。Pr人民へ教え導いたものが、レーニンとボルシェウイキ党であった。彼らは、①Prに、レーニンの諸文献(「発達」何をなすべし)「二つの戦術」「帝国主義論」「四月テーゼ」「国家と革命」等に代表される主張でもって、社会排外主義、議会主義、経済主義との闘いの必要性を訴え、世界革命、暴力革命、武装蜂起に着手することを公然と主張し、実際に、これらを、計画的、組織的に実践しようとしたのであった。②更に、彼等は、この闘争を、自然発生的手工業的、無政府的に、闘うのではなく、目的意識的、計画的、組織的に闘うものとして、前衛的、計画的、組織的団結IIプロレタリア前衛党の必要性と、この建設の、計画的着手を現に行なった。彼らはPrの革命に向けての自然発生的、非計画的、非組織性を克服することが、即ち、プロレタリア革命の自然成長性に対して前衛と党が、目的意識的に、計画的、組織的に、これを成長させるには、個々の党としての闘争に於て、意識的で、Prを成長させるべく闘うには、又その事に、真に意識的である為には、党自身に於て、Prの自然発生的性、別の形態をもつて、転倒してもちこまれる。前衛自身党内政治生活の自然成長性として発現することに於て、目的意識的、計画的、組織的闘いが、党の為の闘いとして、二重に推進されねばならなかつた。即ち彼等は、革命的意識的計画的貫徹を、党としての、狭い意味での階級形成II党としての闘いを担い、プロレタリア革命の、媒介体である前衛党自身の、理論的、政治的、組織的な面にわたる強化—建設に迄貫徹したのであった。

かかる党としての闘争と、党の為の闘争の、二重の意識性、計画的性、同時に、一体に表現してゆくものとして、全国政治新聞に媒介され、中央集権的職革命の党と、鉄の規律によって、前衛が、団結せしめられた党組織の型を獲得したのであった。かくして彼等は、マルクス・エンゲルスを、発展止揚し、革命論を進展させ、これを前衛党建設として、総括—止揚したのであった。マルクス・エンゲルスは、唯物弁証法—史的唯物論—マルクス主義経済学、共産主義、「国家と世界革命」における、暴力革命の学説とし、この理論をもつて、マルクス主義の創成の基礎とし、「(歴史的)位置をもつが」にもかかわらず、「戦争と民族問題」「戦争と民主主義」問題、階級形成、党形成、指導—被指導等の領域の、党建設論に於ける諸問題に、未完成で、実践的には、レーニンとボ

独のスパルタクス団、オプロイテ、伊のグラムシ派、インド、中国の闘争、

級への飛躍と成長に対して、これらに対する英、米、仏、独、日、連合国、枢軸国を問わず帝国主義列強は一齐に侵略、反革命を開始し、被支配階級に転落したブルジョアジーは、ロシア国内に於いて列強の侵略、反革命と結合し、反革命内戦を持続した。ロシア武装プロレタリアートは、権力を掌握し、支配階級として成長すると同時に、革命の「防衛戦争」に追いこまざるを得なかつた。他方、列強内部のプロレタリア人民、後進国のプロレタリア人民は、帝国主義戦争の災害から革命に決起した。これと一体にロシア革命擁護の闘いを展開し、全面的に世界革命は成熟していった。

日本の米騒動、無産党の創設が中心動向であった。帝国主義戦争の持続は世界革命を成熟させ、ロシア革命はこれを決定的に質的に促進せしめた。ブルジョアジーは、他の帝国主義と闘わねばならぬと同時に、かつては現実形態的には一国的に民族・国民として分断されたプロレタリアと闘えばよかつたのに対して、武装された世界革命の根拠地に媒介され、現実形態的に結合した世界プロレタリアートと闘わねばならなかつたことを意味する。帝国主義戦争は各国のプロレタリアとその党を世界的に結合せしめた。だがこれは帝国主義戦争と、ブルジョアジーによって受動的に結合されたものであるが、ロシア革命による支配階級としてのプロレタリアと、その党の登場は、この世界プロレタリアートの受動的な能動性に、質的に飛躍せしめたのだ。これは、ブルジョアジーにとって資本の世界性にも拘らず、自らが一国的にしか存在し得ないことを露呈させたこと他ならぬ、他方プロレタリアートにとって、自らの世界プロレタリアの普遍性がより歴史的、現実的に全面化したものに他ならない。

かつブルジョアジーが総体として防衛的となり、プロレタリアートが攻撃的になり、過去の関係を連続せしめる契機を歴史的に与えられたことを意味する。事実、ロシア革命の内戦の勝利からポーランド進撃の過程は、全世界のプロレタリアートの自然発生的革命戦争への進撃過程でもあった。ブルジョアジーの戦線は、交戦帝国主義と、ロシア赤軍を中核とする世界革命戦線のプロレタリアートの戦線、二重の戦線に分断され混乱し分裂して行った。ロシア武装蜂起の成立—内戦勝利—各国プロレタリアの蜂起—ポーランド進撃と帝国主

義の戦線の分裂は、過渡期世界以前の、ブルジョアとプロレタリアートに於ける歴史的総体の力関係を、前者が支配関係を維持することに於いて変化してはならないが、にも拘らずブルジョアはプロレタリアートに対して、受動的、防衛的であり、プロレタリアートは被支配からの反撃に於いて、能動的、攻撃的になったことを意味するのであった。

だが、当のかかる世界力の関係の逆転を生み出したレーニンとボルシェヴィキすらも、或いは「遅すぎた分離の早すぎた蜂起」として実践的には結果した。独革命の指導者ローザとスパルタクス団も、或いは伊革命のグラマン派も、或いは全世界の革命的な党派も又、おしなべてこの世界史の力関係の変化を理解することはできなかった。或いは理解しても、これに一挙的に対応する程には過去の世界プロレタリアートは計画的に組織され得ていなかった歴史の重みそのものが、逆にかかる理解と対応をばんだといつてもいい、これは端的にポーランド共産党の動揺とプロレタリアの反共民族主義の汚染としてあつたし、ブレンド・リトフスク講和に於けるボルシェヴィキと第三インターの大混乱として結果したのであった。

明きらかにロシア革命は世界革命の突破口として、世界革命の最前線としての位置をしめ、全世界の反乱を世界革命戦争として組織し、ポーランドから独ヨーロッパ進撃を徹底的に貫徹し、帝国主義列強の共同反革命戦線を打ち破り、この共同戦線の勝利の維持に於いて、列強の絶対的矛盾がかりうじて恩赦されていた関係を、突き出し、帝国主義の矛盾、帝国主義戦争を一層持続せしめ、個々に分断せしめ、かかる分断から国民的基礎を失った上での、ブルジョアジーの反革命戦線に統合せしめ（この場合確実な米・英帝国主義がその中核になつたであろう）、全面的な世界革命戦争を展開せしめるべきであつた。勿論このことは、二つの敵、味方に於ける歴史的制約をもち、限界性のあるものであつたろう。何故ならば、大陸から離れ、興隆しつつあつた新興米帝と、老一流帝国主義英帝の存在であり、かつ第三インターの中核、レーニンとボルシェヴィキの歴史的主体的限界である。

米・英等帝国主義列強は、ロシア革命と、これを根拠地として媒介する世界革命の世界革命戦争への質的形態転換を通じた世界プロレタリアートの前進を極端に連合国プロッタの帝国主義戦争の勝利と同時に反革命すること

かかる第三インターの根本的限界と混乱、その後の誤謬を積み上げた要因は以下の二つである。

①帝国主義と帝国主義間戦争によつて、即ち敵ブルジョアジーによつて、世界プロレタリアートはその世界性、共産主義的社会性、軍事性を受動的に与えられ、この二つの目的意識性の萌芽を自国のブルジョアジーに集中し、即ちその世界性を一国的に惹起し、味方階級の力をことごとく結果し、粉砕可能な弱敵に自国ブルジョアジーに集中する。これが「帝国主義戦争を内乱へ」の意義であり、世界性と一國性の統合であり、世界革命の結節点としての自国帝国主義打倒がプロレタリア国際主義の最高の基準であると云われる理由である。

だが武装蜂起に媒介された革命の次の段階は、プロレタリアートの集中された力を再び世界性に於いて統合するのであるし、統合しなければならぬ。何故ならば、全く何の物質力も持たぬ被支配階級としてのプロレタリアートが、ブルジョアジーを打倒し支配階級に転化するには、帝国主義戦争を媒介し他国のプロレタリアを打倒し人民の全ゆる矛盾を自国のブルジョアジーに向かわせ、（民族自決権の承認）民族運動を革命の世界的同盟軍とレーニンはした。）同時に、国内の国民的諸階級の矛盾を国民的民族的な要求として、その先頭にプロレタリアートが立ち、二つの戦術的労働の革命的民主的独裁はこの様な意味をもつ）力をことごとくブルジョアジーに向ける必要があり、唯一この過程を経ずしては武装は不可能であつた。

だが被抑圧人民を国際的に結集し、且つ、国内諸階級、諸階級の矛盾を国民的にブルジョアジーに向け結集し、その克服をプロレタリアートが担うこと自体最も矛盾に満ちたものである。プロレタリアートを国民的支配階級のみ固定し、国際的の同盟軍を民族的なものに固定し、国内諸階級、諸階層を国民的のものに固定することに於いて、自己が国民的支配階級として転化し、支配階級としてのプロレタリアに反抗し、プロレタリアートは本来の姿に世界プロレタリアートと自己が国民、民族を通して支配階級として登場してきた過去の民族性、国民性と分裂し、新たな指導が与えられない限り、支配階級としてのプロレタリアートは、民族的・一國的・ブルジョアのものに實質していくのであつた。

だが、かかるプロレタリアートの支配階級としての矛盾は、成熟しつつある

全力を尽した。極軸側側の敗退過程に於いて、米帝は、世界反革命戦線の盟主的存在に飛躍した。敗戦諸国の市場の再分割を敗戦諸国そのものの革命戦争を反革命抑圧し、利益を獲得しつつ、合わせて世界革命戦争をロシアに封じ込め、かつロシア革命を破産せしめ、逆にこれを自らの再分割市場に転化せんとし、ロシア革命粉砕の反革命戦線を構築した。これは世界プロレタリアートとロシアプロレタリアートの団結によつて阻まれこそすれ、結果的に、ベルサイユイニョワール体制として「極軸側側」の「ロシア革命包圍」の侵略、反革命性を物化したのである。ボルシェヴィキを中核とする第三インターは、帝国主義間強盗戦争による各国のプロレタリア革命とロシア革命の結合が、世界史的に①ブルジョアジーの世界性と一國性の矛盾の根底的露呈②プロレタリアートの抑制的民族性・国民性・一國性の克服と世界武装プロレタリアートとして現実形態的に世界性、共産主義的社会性、軍事性を強め、自然発生の成熟の関係を媒介されて、世界革命が、各国、各プロッタの歴史の個性性を越え、単一の有機的、永続的な世界革命戦争とこれを通じた世界プロレタリア結節点とする世界社会主義に時間的論理的に同時に統一されつつある方向に向かっていることに無理解であつた。

第三インターの展望していた革命は「帝国主義戦争を内乱へ」であり、各国の帝国主義戦争のブルジョアジーの危機に対して、各国毎の「反乱」であり、その限りでは世界革命は、各国の総和寄せ集め革命であり、この相互連関関係は、イデオロギー的・組織的な政治的影響力を及ぼし合う関係ではない。ロシア、ソヴェエトはまず何よりも革命の防衛、革命的祖国防衛戦争におかれ、防衛そのものが反革命戦線とロシア赤軍の攻防を通しての、攻防の世界革命戦争化、この担い手であるロシア赤軍の一國的、民族的、国民的の残存を拡張して世界赤軍の中核化、ロシア・ソヴェエトの世界革命戦争の、世界プロレタリアートの結核機関、世界革命戦線の中核への転化としてはなく、世界革命はその世界革命の認識に於いて、それが現実形態的に単一性を持つていても、本来よせ集められた連合党であり、ロシア赤軍はロシアの支配階級として国民的、民族的に成長したその軍隊でしかなく、ソヴェエトも同様であつた。それ故世界革命の連合的性格は、巨大ロシアの出先機関のものととして単一的であつたのだ。

世界革命情勢に対するブルジョアジーの混乱と分裂をもつての世界侵略①反革命戦争によつて、これに対決し、これを各国の革命戦争と結合し、世界革命として開かれることに於いてのみ新たな展開を与えられ、革命は攻勢の中で防衛され成長、発展するのであつた。

それ故、かかる一國の革命のその初期に於いて、世界性を一國にたぐり込み逆にその矛盾を世界的に展開せしめる世界性に媒介されての、世界革命戦争としての世界革命への飛躍と成長の全過程を予見し、展望し、本来、党一赤軍一ソヴェエトは、ソヴェエト一赤軍一党として国民的の下から組織され、党一赤軍一ソヴェエトに於いて、世界党一世界赤軍一世界革命戦線として、下からの上からの組織される二重の組織行程を統一することをもつて、「下からの革命の一國的展開、世界的展開」を上から、未来から、世界同時革命①世界革命戦争として、二重の組織過程を経て党は組織していかねばならぬ。レーニンとボルシェヴィキはかかる世界一國同時革命の内的矛盾の展開を「世界プロレタリア世界社会主義一世界共産主義」の成長構造を展望するに不十分で、歴史的制約故に、帝国主義打倒とプロレタリアートの支配階級としての転化の戦術①戦術に世界革命を狭めざるを得なかつたのである。

それ故に、「帝国主義戦争を内乱へ」「帝国主義論」！「國家と革命」！「二つの戦術」「民族自決権」等の自国帝国主義打倒に向けて、革命性を世界革命戦争の成長転化過程で（否、二月革命以降）反動的な性格に転化していくこと自体に無自覚であつた。

②又、ロシア革命と結合した他国の革命は、ロシア革命に展開された革命の世界性と一國性の二重性の歴史的展開をそっくりそのまま追体験することを全く意味しない。何故なら逆転しつつある世界史の力関係と武装プロレタリアートへの成熟を最早前提にして立てられなければならないからである。下からの自然成長と発展の論理は、ロシア革命の如くそれ自体自律的には如何に帝国主義の災禍が多であれ迎いはしない。

典型的に独に見られる如く、既に独ブルジョアジーは反共民族主義であり、独社民と連合し、小ブル、農民は反共民族主義に汚染され始めていたのであつた。この下からの論理を推進させつつも、むしろ上からの党の「世界党一世界赤軍一世界革命戦線一世界革命戦争」路線が、ロシア革命の世界革命への成

長転化過程と結合し、大胆に推進されねばならなかったのである。

これは二重の意味でそうである。第一は、当該国の革命の世界的関係に媒介された性格の転換に於いて、同時に、第二に、ロシア革命の一切の帝国主義の反革命の集中砲火に於いて、世界プロの前衛の負担は余りにも重すぎ、疎外され、変質の危機に不可避に見舞われざるを得なかったからである。

だが、コミンテルンのとった路線は、ロシア革命の下から比重を置いた一國革命、世界寄せ集め路線であったのだ。

かくして、コミンテルンは、初期中期レーニン主義を帝国主義戦争とロシア革命の成立を通して到達し、成熟した世界武装プロの新たな世界性と一國性の矛盾を、その世界性、共産主義の社会性、軍事性を媒介し、「世界同時革命」を踏襲し、後期レーニン主義の混乱を説明することなく、初期中期レーニン主義を踏襲し、後期レーニン主義の混乱を説明することは出来ず、世界革命の挫折→左翼小児病(コニ回大会)→ネップ、世界赤軍の否定、労働組合の世界革命戦争に向けての生産軍隊化の否定、ソヴェットの民族、国民国家への固定と党と国家の一体化等へ混乱を深めていったのであった。そしてこれは、レーニン主義教条化として、世界寄せ集め革命→一國社会主義建設可能論として、スターリニズムを誕生せしめ、ロシアプロレタリアをブルジョア的なものに墮落せしめ、世界武装プロは自然発生性のままに放置されてしまったのだ。

第三節 過渡期社会とスターリニズム

一 逆制約の能動的対応の第二テーゼ

史上第一の世界革命の波を乗り切り、延命した帝国主義とブルジョアジーは依然として過渡期世界の支配的体系はその経済的次元に於て、腐朽と寄生性を全面化しつつあったし、帝国主義国家とブルジョアジーは自己の絶対的矛盾を止揚することなく、深化めつつあった。この帝国主義の支配的体系と国家とブルジョアジーの矛盾の統一の把握は、帝国主義戦争から世界革命との結合を通して、世界武装プロの登場と成熟→進撃を、侵略、抑圧、反革命する歴史の対応そのものに刻印され、現に存在する世界武装プロの能動性(世界性、

社会性、軍事性)をたぐり込み、変質せしめることに於いて統一して扱えられねばならぬ。又、このことはその別の側面として、かく扱えられねばならぬ。即ち、帝国主義戦争の過程でのロシア革命の成立を媒介とする世界武装プロの誕生とその自然発生性が帝国主義の侵略、反革命をロシアの支配階級としてのプロに集中したに於けること、これを一國的、民族的、国民的のみに疎外したに於いて、帝国主義の側に繰り込まれ、培養され、帝国主義世界下のプロに乗り移り、発現するものとして(とりわけ後進国から発現する)扱えられねばならぬ。

即ち、帝国主義戦争を通じて受動的に世界武装プロは、第一次世界革命戦争の過程で、対峙関係を形成し、自律的であった世界武装プロは再び現代帝国主義と現代帝国主義国家に媒介され、制約され、支配され、その帝国主義→国家→ブルジョアジーの新たな高次元の動向を通して、その新たな高次元の動向そのものを媒介し、世界武装プロの歴史的自然発生性を抬頭させるのである。それ故、我々はこの歴史的世界武装プロの現実的形態的、自然発生性をより現実形態的に、現代帝国主義→現代帝国主義国家の分析を通して措定しなければならぬ。この点に於いては、第三章に譲り詳しく展開するが、以下の点だけは明確に踏まえておかねばならぬ。

唯物史観の領域に於ける階級闘争の質的段階と現実形態的連関が理解し得ず、即ち、歴史の段階に於ける自然発生性とその目的意識性の相互連関が分らず、④唯物史観の次元の問題を直線的に現実形態性に持ち込んだり、⑤逆に、現実形態性に於ける、世界武装プロの自然発生性とその拝脱の諸形態がかり見、唯物史観の次元に於いて、到達した世界武装プロの意識性の萌芽を見落す、現実形態的世界武装プロの自然発生性拝脱の形態(スターリニズム)を即自的に克服せんとするが余りに、過渡期世界論を媒介にしてのレーニン主義を発展止揚する新たな革命論体系への創造的動向を放棄する、産湯を流すつもりで赤子まで流してしまふ思考法である。いづれの両者をも「ブルジョアジーの制約支配攻撃→プロの制約→逆制約」の関係に於ける逆制約に於けるプロの能動的対応を把みとりきれない。

二つの誤った傾向の内容と方法論的誤謬については第一章で説明したのでここでは述べず、この唯物史観と現実形態性を媒介する核心点(過渡期社会と

スターリニズムをどのように把めるかについて説明しておく。

前者はこのブルとプロの基本関係を否定し、無媒介の主観によって能動性と結合せんとし、他方、後者は基本関係を位置付けつつも、ブルの打倒を以前の防衛的受動的対応として、何の変化もないかの如く思考し、いづれもプロの逆制約を通じた能動性を、目的意識的に発現しようとし、共に共通なのだ。

過渡期社会の階級闘争・支配階級として

①我々は第二節に於いて、ロシア革命とレーニン主義の関連で、世界武装プロレタリアートへの質的飛躍と新たな矛盾を説明してきたが、ここでは世界武装プロレタリアートの矛盾を、過渡期社会との関係で、歴史的論理的に説明することによって、より立ち入って説明しよう。これはいわゆる過渡期社会の運動法則の解明になることはいまでもない。

我々は過渡期社会も、階級対立が再生産され、階級闘争が展開される以上、この解明は明らかに支配階級としてのプロレタリアートの矛盾の解明である以上、党→赤軍→ソヴェット(一國国家)→支配階級としてのプロレタリアの連関に於ける歴史的矛盾の解明として展開するのである。

過渡期社会に於て階級対立が存在し、階級闘争が展開されていることは事実であり、論証をまたないことである。ソ連スターリニズムが述べる如く「全人民国国家」や「第三範疇」が存在しないことは明らかである。ブルジョア社会の階級闘争と決定的に異なる点は、ブルジョアが被支配階級であり、プロレタリアートが支配階級としてあることである。第二に、国家権力の諸活動→軍隊を握っており、このことを通じて、党と軍隊とソヴェットの目的意識的結合によって、資本制生産関係と私有財産制度を、社会主義的に廃棄し、置きかえ、生産力を社会主義経済の方向で生成せしめ、発展せしめ得る可能性を、ブルジョアとその他のブルジョアの階層の根底的打倒を通じて、展開しようという性格を内包していることであって、これ以下でも以上でもない。

党→赤軍→ソヴェットの相互連関のあり方の確定を通して、個々の独自の意識的世界階級闘争の一環としての任務と切り離されたかたちで考える、社会主義経済論の好きな革マル、中核、或いは対島、トニークリフ等の前提には、根

底的な経済主義→生産力主義が存在して、それ故、過渡期社会に於ける経済発展を通じて階級闘争消滅論→一國社会主義可能論がスターリニストと同様に潜在していることである。これは彼らが、社会主義経済論をマルクス主義経済学の方法でもって解明し、土台→上部構造論等で過渡期社会を解明しようとしたところに見られる。(「日本の反スタ」革マル派)

マルクス主義経済学は、ただ唯一資本主義の解明であり、広義の意味で、プロレタリア革命の革命論の土台である。何故階級闘争→諸階級の解明が科学的、論理的な姿で、土台→上部構造の関係を通過して解明できたのか、その対象である資本制社会がブルジョア革命を通して、私有財産制度を社会制度として定着し、これを媒介に資本制生産と生産諸関係が定着し、一切の労働力が商品化し、価値法則が貫徹したが故に、社会的諸関係→交通関係が物化し、資本制経済過程のみ込まれ、上部構造を規定した特異な資本制商品社会であったからに他ならない。過渡期社会は価値法則貫徹の資本制生産を、その諸関係、諸社会制度を維持せんとするブルジョアを打倒し、社会革命の過程を歩み始めた社会に他ならない。即ち、社会的生産力を、個的→共同体的所有として(労働の量に応じて分配する)分配する方向に生産→交換→消費の関係を、党→赤軍→ソヴェットの正しい関係を通しての階級闘争を通じて、社会関係を解体→再編、制度化する社会革命→プロ独運動が存在するのである。

それ故、過渡期社会経済は、階級闘争→党→赤軍→ソヴェットの目的意識的闘争と不可分一体の政策の問題であり、同じことでもあるのだ。だから我々は社会主義経済論として扱えずとも思われない、経済問題をまさに「階級闘争の問題」として扱えずとも思われない、何故なら、過渡期社会は言う迄もなく①帝国主義の市場再分割戦と反革命の対象であり、帝国主義からの日常普及の反革命攻勢にさらされ、これと一体に結合したブルジョアとその勢力が内部から反革命反乱活動を行ない②資本制生産関係の諸母班が革命的歴史の個別性に於て相異こそすれ、残存し、或いは一舉的に社会主義的政策を導入しえず、迂回的妥協的に導入しなければならぬこと、労働の質に於ける分配を余儀なくすること、(技術者、軍人、科学者等)、或いは農民問題に於て一舉的の国有化の困難性、或いは工業化問題に於ても同様であり、総じて資本制生産関係が残在し、③生産力と生産の絶対的限界、これは社会主義経済が

唯一世界社会主義によって実現されるからばかりでなく、革命が後進國中進国に於て獲得され、社会主義原始蓄積を資本主義から遺産されなかつたことも大きく獲得する。

③は①に媒介され、不可避に生産—分配—所有—消費に於る関係をブルジョアの手に至ませ、独特な社会制度を固定させる可能性をもち、ここからプロレタリアの勢力とブルジョアの勢力との階級闘争は再生産され、貫徹されてゆくのである。それ故にこそ、経済問題は過渡期社会に於ては、ブルジョア社会と相異し、「経済問題—階級闘争の問題」であるのだ。

狭い意味での経済問題は、経済問題からの階級対立の媒介的基礎的契機—帝国主义の打倒と、この打倒を通じて世界社会主義経済の獲得に優先されねばならない。この方向に於てのみ、狭い意味での経済問題は解決の方向を設定されねばならない。即ち生産力の限界と帝国主義の反革命政勢との結合した階級対立の激化は、世界革命戦争—世界プロレタリア独—世界社会主義の方向に於て支配階級としてのプロレタリアの意識性に於て唯一止揚の方向を見出すのである。

かかる方向は、世界武装プロレタリアの最前衛部隊として「世界革命戦争—世界プロレタリアの道」を実際に展開可能なものとするのである。

②かかる階級対立—階級闘争—プロレタリアの勢力とブルジョアの勢力との闘争、プロレタリアイデオロギーとブルジョアイデオロギーとの闘争等全領域に互る支配階級としてのプロレタリアの闘争が不断に用意されない限り、プロレタリアートは一国的、民族的、ブルジョアのなにもに支配階級でありながらも自らを変質せしめてしまうのである。

そして過渡期社会の諸制度を、ソヴィエトを、一国的、民族的、国民的国家として固定してゆくことを機軸にブルジョアのなにもに歪め固定化、赤軍を世界赤軍ではなく、国民的支配階級としての利益の枠に固定した「赤色国民軍隊」から「民族の、国民的利益を防御するの質に変質せしめるのである。かつ、プロレタリア党も、その内部の前衛を、情況、国民的民族性に押込せしめ、固定し、ブルジョアのなにもに変質せしめ、党は「世界革命—世界社会主義を放棄することによって」国家を支配し、党活動は国家活動に一体化し、溶解してゆくのである。スターリニズムとスターリニストレヂームは、かくして、特殊にレーニンの党組織論に於て政治内容抜きに武装される時、党独裁に於て、支

配階級のブルジョア性に押込した傾向を集中し、党独裁—国家—赤軍の系列を通じて固定されてゆくのである。

支配階級としてのプロレタリアートの矛盾の展開—党—赤軍—ソヴィエトの世界性と一国的性
ところで本題の課題は、②③を一定の前提にしつつもかかる支配階級としてのプロレタリアートの矛盾を「党—赤軍—ソヴィエト」の世界性、一国的性の矛盾に媒介されて如何に主体的に展開するかに於てスターリニズムが発生したかを歴史的に解明することにある。

レーニンとボリシェヴィキは、帝国主义戦争とその災禍を通じて受動的に結合された世界プロレタリアートと人民をして、この世界性、民族性、国民性を媒介して自国のブルジョアに対して、自国帝国主义打倒としてことごとくこの力を集中する戦略—戦術によって、ロシアプロレタリアを支配階級に導いた。ロシアに於て支配階級として組織されたプロレタリアートが登場することに於て帝国主义は反革命戦線を形成しこの粉碎をめざし、他方世界プロレタリアートはこれを媒介して世界武装プロレタリアートに成長し始めた。ロシアの支配階級としてのプロレタリアートは不可避に過渡期世界の世界武装プロレタリアートを過渡期世界の支配階級に組織する前衛部隊としての位置を問われ、他方過去の被支配階級からロシア一国の支配階級に成長飛躍する過程に於て自らを帝国主义の矛盾を国民的、民族的、即ち「帝国主义戦争を内乱へ」とそこから、引き出される「寄せ集め世界革命」と「革命的祖国防衛戦争」—「一国的社会主義を、世界—一国的同時革命戦争として止揚し、他方「党—赤軍—ソヴィエト」を、「世界党—世界赤軍—世界革命戦線」として、一国的性を世界性に於て止揚することを問われた。これはまずロシア共産党に於て、党の前衛自身の自然成長性を克服し、価値基準を転倒せしめるものとして「世界党」への改組、下からの、赤衛隊—赤軍の防衛的、受動的なものの指導の質を物化した質を、組織の型から、「キム」を中核体として、攻撃的、能動的な世界革命の質を体現せしめ得る「世界赤軍—世界革命戦線」の連関に於て、指導しえる世界革命戦争の統合総司令部を、担うものとして、決定的な改組を行う必要性としてあった。キムは、党直轄の世界赤軍の中核体—ロシア赤軍（各国プロレタリア軍の中核）として組織される必要があった。又ソヴィエトの中核—工場

ソヴィエトは、世界革命戦争を支える生産的的性格に再編することを通じて、ソビエト国家を死滅に向けて世界革命戦争を闘う機関—世界革命戦線に、再編成する必要があった。これ等を通じて貧農階級を世界革命の同盟軍に飛躍せしめるべく、国有化政策を通して富農を徹底的に解体する必要があったのだ。だがレーニンとボリシェヴィキ党は、大胆な路線転換を、貫徹することなく、「妥協」を、かかる路線転換に媒介するものとして位置づけることなく、混乱をくりかえし支配階級としてのプロレタリアの自然発生性に、押込したのである。このことは根本的には、レーニン主義が、帝国主义打倒の革命論（戦略—戦術—党組織論）として、マルクス主義を、発展—止揚しつつも、更に決定的な一歩として、世界同時革命—世界革命戦争—世界プロレタリアへの革命論へは、止揚しきれなかつたこと、換言すれば、後者の基礎を与えたものとして、偉大な世界史的役割を、果たしたこと。にもかわらぬこととどまつたことであつた。「帝国主义戦争を内乱へ」「帝国主义打倒」「党—赤軍—ソヴィエト」

下からの高度な自然発生性の萌芽として、推進させると同時に、高度な目的意識性を、党から「世界同時革命—世界革命戦争」「世界党—世界赤軍—世界革命戦線」として、上からもこむ、二重の組織過程を、「党の改組」「党と軍事」の問題解決を媒介にして統一して把えかねばならぬ。正に、かかる路線転換の問題をして、かつその総括をして、党の改組の問題をしてかつボリシェヴィキ党と、コミンテルンの、決定的な党内闘争、そして世界革命戦争派が登場しえなかつたことにこそ、世界革命の挫折とスターリニズムが、存在するのである。その後世界武装プロレタリアートは第二コミンテルンを媒介し、ソ連邦を、世界史的根拠地にしつつも、コミンテルン共産主義者を過渡期世界に於て、レーニン主義の石女化と、理論は、直接的引き写しとして現実形態的には、自然発生性そのまま放置し、先進的集団の混乱を深めていったのであつた。だが世界武装プロレタリアートの高次な自然発生性は、ソ連邦と、コミンテルンを媒介しつつも、現実形態的に歪められ疎外されつつも、その党の世界性を生みださないまま発現し第二次大戦過程を経て、コミンテルンと、ソ連は、完全にブルジョアの反革命性に押込し、変質すると同時に、帝国主义世界の、毛沢東等中国共産党等、諸世界革命戦争派の先進的集団に、媒介され、発現していきつつあるのである。

第四節 第三テーゼとレーニン主義の歴史的位置—その発展止揚に ついて

これは、第四章(一)①節に於て一応の展開を、みているので、第五章革命論の項で、現実形態性と統一として、改めて展開する(省略)

〈序〉

①我々はこの章に於て、現代帝國主義國家の歴史的・論理的な分析を通して二章に於て獲得した、世界史的階級闘争と世界プロレタリアートの世界武装プロレタリアートへの歴史的社会的実践的到達点が、どのように現実形態的に展開し、発見されてゆくかを、換言すれば、世界武装プロレタリアートへの八高次の自然発生性と目的意識性の萌芽の問題を、過渡期世界の帝國主義の現実形態的(現代)帝國主義とブルジョアジーの動向・攻撃との関連で、指定し革命論獲得の前提を獲得してゆくのである。

又この作業は、とりもなおさず、第二章の諸編のテーゼを、とりわけ第二テーゼを完成し、第二テーゼの完成を基礎付ける作業である。

と同時に本章の課題は、実践的には、世界的な階級闘争—労働運動—諸党派の分裂を世界史的階級闘争の到達・成熟段階を媒介にして、現代帝國主義の解明を通しての経済的基礎を説明し明らかにすることである。

②今、世界武装プロレタリアートの隊列は、20C初頭の第二インスターの崩壊と腐敗を通して純然たる社会排外主義—社会改良主義に転落した部分(ベルンシュタイン、ミラン、ハイドマン、ゴンパース等)とマルクス主義を濫称しカウツキー等中央派の社会排外主義(口先では社会主義、行動では排外主義)潮流と、レーニン・ボルシェヴィキを中核とする将来第三インスターに結果してゆく革命派との巨大な歴史的分裂を開始したのに、比すところの、それ以上の規模と質をもった、世界史的分裂が開始されている。この分裂は不可避であり、我々は、この分裂を徹頭徹尾—首尾一貫推し進め闘争し、ブルジョアジーに愚弄されている農民や小経営主、そして小ブルジョア的な生活条件におかれている数百万の勤労者とを、ブルジョアジーから奪い返し、前段階階級起世界革命の道を進まねばならぬ。

即ち味方の隊列は以下の三つの潮流に分裂しつつある。帝國主義の特異な永

70年を結節点として、帝國主義列強が、不可避に、米帝と同様に局地的永続的侵略、抑圧—反革命戦争に突き進まざるを得ないこと、更にこれに向けて恐慌の危機の矛盾をもこれに転化—集中すること、それ故、かかる資本と現代帝國主義の衝動に根底をおく質をもった崩壊的フアンズムの権力再編を不可避とすることを理解できないか、この予見される決定的事態に恐怖し認めたがらないのである。

帝國主義の段階の本質と、過渡期世界に媒介された歴史的な現実形態性を區別しつつ、その段階の本質の歴史的現実形態としての展開として、統一することなく、混乱し、帝國主義論を修正し「現代帝國主義論」をデッチあげるのである。超主観的な味方階級の強化を前提として、即ち、「敵の弱体化—味方の強大化」を固定的に把える非弁証法的過渡期世界の誤った把握(「現代革命III」赤軍)を前提として、現代帝國主義は迫り込まれ、自己の矛盾を唯一恐慌回避し、引き延ばしつつの、恐慌の爆発としてしか解決しえなくなつたと、考へるのである。即ち、「生産の集積—資本の過剰—金融寡頭制を通じた國家間の不均等(平準化)な発展—市場再分割戦」としてある帝國主義段階に於ける金融資本の運動—帝國主義の段階の本質は、その市場に於て味方階級が強大化しているが故に、展開しえず、国内過剰資本の国内独資政策を通じた機制的処理を媒介し、矛盾の引き延ばし—大恐慌」として、修正されるのである。

更に、彼らの中には岩田弘等(岩田)の如く、過渡期世界の誤った認識(「全んど全般的危機論と変わらぬ」)を直観的前提とし、レーニン帝國主義論を否定したり、「米帝を頭とする世界資本主義」などという、帝國主義論の純然たる修正をはかり、永続的侵略、抑圧—反革命戦争とその全世界化の衝動を否定し、恐慌の危機と恐慌のみによる矛盾の資本主義的解決を論証しようとする輩もいる。

我々は、成熟から—没落期の現代帝國主義を、①レーニン帝國主義の段階の本質の一層の発展、②独占の高度化—金融寡頭制の強化を通じた過剰資本の国内処理の困難性、③その対外資本輸出の一層の強化、④それ故の金融寡頭制の強化に媒介された國家との一層の全面的ゆ着—占有、⑤過渡期世界の高次の階級闘争に媒介され、かつ、⑥⑦⑧に關係の基礎を置き、⑨國際、国内管理通貨制を契機とした國家の新しい経済的役割(國家資本輸出政府を媒介にして資本商品輸出の促進、經濟的軍事化、固有化—社会保障—労働賃金政

統的局地的侵略抑圧反革命戦争に、そしてその不可避の全世界化衝動に、進んで加担し、利益を得る所を非マルクス主義・マルクス主義を問わず一部のブルジョア化した労働者と労働官僚を基礎とする新たな純然たる社会排外主義—改良主義の帝國主義的労働運動を推進する部分である。

日本では、これは民社—同盟—I.M.F.J.Cや宝樹等右派構改グループに担われ伸長し拡大している。従来「平和主義—民主主義—ボス交賃獲得」の社会党—総評民同は前段階階級起—世界革命戦争の過程で完全に分解されるのである。その第二は、過渡期世界の高次の自然発生性に拜脱—労働者階級の経済主義的・改良主義的・日和見的・不決断等総じて小ブルジョア傾向に拜脱した、新

旧スターリニストの潮流である。これ等は、現代帝國主義の根本的運動を最も奥深い所から把えきれず、現代帝國主義の生産—資本の過剰の戦争への転化と侵略抑圧反革命戦争の永続的推進—その全世界化の衝動を見抜けず、或いはこれを認めることを恐怖し、或いは現に展開している侵略抑圧反革命戦争の性格を見抜けず、それ故、全世界の一国、プロレタリアートの階級闘争を先進国プロレタリアートの前段階階級起を媒介にして、現実形態的に昂めねばならぬことを完全に理論的に実践的に否定しざる部分である。旧スターリニスト日共や構改右派は、現代帝國主義とその侵略抑圧反革命戦争の攻撃に全世界的に客観的に屈服し、手を貸しているスターリニズムを背景に、國際的に結合し、再び反ファシズム—人民戦線の敗北と革命への味方の隊列からの反革命別動隊としての道を行んでいる。

謂ゆる新左翼諸派(勿論、同盟中央派・中大派もこれに入る、そればかりか、この典型になりつつある)は、かかる旧スターリニズムを実践的政治的組織的理論的に乗り越えんとしつつも、今やその挫折から、新たなスターリニズムへと転落しつつある。

彼らは総じて、成長しつつある現代世界同時革命—前段階階級起—世界革命(先進国にあっては)を形成する革命的階級危機が、現代帝國主義の権力再編—永続的局地的侵略抑圧反革命戦争、その全世界化の衝動とこれに向けての権力再編の基本的性格を通して成熟しつつあることを否定する。

彼等は、現在、米帝が過去展開した朝鮮戦争や、現在展開しているベトナム侵略、抑圧—反革命戦争が、現代帝國主義の矛盾の唯一の解決形態であり69・

策69)によつて、過剰資本の累積とその国内—國家間での不均衡からの恐慌が、帝國主義間の市場の分割—再分割を通じた、國家間の不均衡な過剰資本の累積に於て、これが世界統一市場の維持機構を自律的に解体して、信用恐慌—過剰生産恐慌として発現するのに対して、現に、29年—30年の世界恐慌は、米帝と西歐帝國主義との不均衡を、金本位制を解体して突き進んだが、この大恐慌を経て、大戦後に於て、この國家間の不均衡な発展(平準化)に於ける不均衡性は、極限にまで最大限調整され、分割—再分割戦が展開されるが故に、(それ故にこそ)これはなし崩壊的であるし、又、かかる媒介を通しての市場再分割戦は、逆に、國際通貨体制を増々調整力に引き延ばされるのである。この不均衡の根拠ともなる過剰資本の無政府性(—一国内に於る独占体、個別資本間の不均衡性は、國家の新しいともいえる経済的役割をもつて、媒介的に對外市場に投下されていくことを通じて、政策的に極限にまで是正される。正に不均衡性を是正し、對外市場への投下の媒介性を担うものこそが、局地的侵略、抑圧—反革命戦争の一連の体系的諸動向であり、その中心こそが、軍事スベンディングに媒介された經濟的軍事化である。

以上からして、我々は、恐慌の可能性を全く排除するものではないが、恐慌を引き起す矛盾が、その発現形態を恐慌なく、國際—一國的通貨制を媒介してのなし崩壊し統制經濟化過程を通して、國独自の統制經濟的政策の遂行によるプロレタリア人民への不断の恒常的転化と國家に媒介され、これと経済的なものと政治的な矛盾とが一体化し、局地的、永続的、侵略、抑圧—反革命戦争への推移として発現していくと考へるのである。

そして、彼らは、権力再編の問題を、味方階級の、強化を、唯一マルクマールとする(だから逆論すれば、味方の出力によつて、どこにでも権力再編の時期は、変えられる)ブルジョアジーの、恐慌回避の、國獨資政策を、推進してゆく為の、政策の、貫徹としての権力再編として把えるのである。ここに至つて、権力再編は、「最も奥深い経済活動の根源」から把えられるのではなく、政策一般として、だから反動化の一般の深下として把握される。そして当然にも、前段階階級起は、棚上げされ「権力再編」との闘いを通じた前段階階級戦の曖昧性は、当然にも権力闘争ではなく、安保決戦—巨大な安保大衆闘争へ後退す

るのである。かかる、新左翼諸派の、墮落と、新スターリニズムとしての、誕生の動向は、全世界の列強の権力再編を通じた、前段階蜂起—世界革命戦争の、推進を媒介とする、一国、三プロットの、世界階級闘争の、世界革命戦争への転化の、目的意識性の、萌芽をつみとり、高次自然発生性に拝跪し、カウツキー中央派と歴史的作用を同様、マルクス主義を、濫称し、口先では社会主義、実践では排外主義へと転落する道を一歩一歩歩むことになるのである。何故、彼等が、排外主義への転落を不可避とするかと言えば以下である。

彼らの「現代帝国主義論」からして、帝国主義とブルジョアジーは、侵略、抑圧—反革命の軍事—外交には、限界を感じ、その主要攻撃の方向を、民主主義の破壊—労働者の全ゆる領域での収奪と抑圧の強化が集中してくる、労働者の組合主義—経済主義的傾向と結合し、にもかかわらず、彼らの革命論は、彼らの「現代帝国主義論」からして、一国的で、プロレタリア国際主義を実践的には放棄しているが故に、(如何に、口先で、世界同時革命や、世界革命戦争を叫ぼうとも)、その意識性の萌芽を、開花させることは、出来ない。一方労働者階級は、現代帝国主義の運動からして、その特異な、侵略—抑圧—反革命戦争に向けての策動とこの実現を通じて、超過剰利潤の一部を、純粋社会排外主義—社会改良主義の潮流に分配することに於て成立する一部の労働貴族—労働代官反の動向に僅れ経済主義と、排外主義が結合するような動向が、達成され始めるが故に、この排外主義とも闘争ができません、結局、過渡期世界の新たな社会排外主義と社会改良主義の結合で開えず、不断に、動揺し、口先だけの「マルクス主義」実践的には排外主義になるのである。換言すれば彼らは、世界武装プロレタリアートの高次自然発生性(経済主義、改良主義、排外主義と前段階蜂起—世界革命戦争)の戦闘性(経済主義、改良主義)を基礎として、存在し、その表現であるのだ。この潮流は現代の新カウツキー中央派として、69—70を経て登場する運命にある。そして革命論の理論的支柱は、レーニン主義の教条化、その理論の、引き写しとして、新たなスターリン主義である。第三に我々を先頭とする、世界同時革命—世界革命戦争—世界赤軍—世界革命戦線の、革命論に結果する、真の革命派である。

③我々は、この章で、以上からして、帝国主義の修正—恐慌革命論派とも言える潮流との闘いを念頭に置き①過渡期世界の階級闘争の世界史的特質を踏列強の大戦からの再建と独占の高度化—資本の過剰化と不均等な発展とその不均衡性は、金本位制再建を媒介し米—独—英、仏—米の過剰資本の処理(とりわけ米帝のそれ)のメカニズムをもつことによって調整され、かろうじて世界市場の統一性は維持されていたのであった。

かかる資本決済機構に媒介された現代帝国主義の統一均衡の発展は、他方で過渡期世界の階級闘争の集中的発現形態に於て、独プロレタリアートの世界武装プロレタリアートとしての展開を粉碎、反革命し、ソ連を反革命包囲するものとして英、米、仏とワイマル、ブルジョアジーの経済的利益と同時に、ベルサイユ—ワイマル体制としてあったことを、一方に於いて一体に把えておく必要がある。

だが、列強の不均等な発展と資本過剰の不均衡を是正する世界貨幣市場とその信用機構の崩壊—多角的決済機構と多角的貿易機構の解体が、米帝の28、29年の株式の投機熱から対外投資の激減、金利の騰貴—株式ブーム抑制の公定歩合引き上げとして開始された。この為に短期資本の米内部への逆流を経てこの不均衡は世界貨幣市場と信用機構を混乱から崩壊に導き、信用恐慌を作り出し、世界恐慌は米の対外投資の停止—資本決済ルート—再建金本位制を解体させ、全世界の過剰生産恐慌を激化させたのであった。かかる歴史の自体的根源は、米帝に全面化した独占の高度化の必然化としての資本の過剰と、国家間の不均等な発展とその不均衡性にもとも根拠をおくものであった。

だが帝国主義段階の恐慌は、国家間の不均等な発展の不均衡性をもって、信用—資本決済機構を解体しはするが、これによって産業資本主義段階の恐慌の

え、帝国主義の段階的本質を、踏えつつこの貫徹を、②過渡期世界の帝国主義(現代帝国主義)を、歴史的に、生成—発展—成熟—没落として、歴史的、理論的に、明らかにし、③いわゆる恐慌革命論に帰結される、「現代帝国主義論」とその「国家論」を、かんがなきまで粉碎することを任務としなければならぬ。

第一節

(1)現代帝国主義の生成—発展

独占の高度化—資本の過剰化—過剰資本の対外処理の困難性—世界恐慌—統制経済—帝国主義戦争

レーニンの叙述した帝国主義の最終段階としての現代帝国主義は、ロシア革命と世界革命の挫折を通して、過渡期世界に於て延命した帝国主義である。我々はその歴史的発展の典型を、米帝に且つ補足的に独帝国主義を見出すとしても、さしつかえない。何故なら米帝は、最もレーニン帝国主義の段階の本質と、その現行形態の現代帝国主義としての歴史的発展の中に展開させているからである。

我々は米帝と独帝とを典型軸にしつつ現代帝国主義の歴史を眺めてみよう。米帝国主義は20C初頭石炭—鉄鋼部門に於ける大合同運動を展開し独占を形成した。第一次世界大戦の過程で、大戦に於いて直接本国を戦場としないことに於いて、しかも西欧帝国主義の帝国主義戦争勝利にむけての生産力増強戦に原料資源—重化学工業品—兵器の輸出国としてあったが故に、且つ自ら所与の自然的資源に恵まれることに於いて、急速に重化学工業を推進し、二〇年代中期、独占を耐久消費財部門の第二次大合同運動を展開し、独占の圧倒的高度化を耐久消費財部門にまで貫徹し、金融寡頭制を強化したのがあった。独、英、仏等も又大戦の荒廃から立ち直り、重化学工業化—独占の高度化—金融寡頭制の強化を行なった。

米帝はカルテル、トラスト、シンジケートの生産財—耐久消費財部門への発展と独占の高度化—金融資本の超巨大化と金融寡頭制を通じて国家の占有はその資本の過剰化を大陸市場へ放出したのであった。

この西欧帝国主義との不均等な発展と不均衡性は、世界恐慌をひき起こし、帝

如く、資本主義そのもの即ち、生産力と生産関係の矛盾を資本主義的に解決し、新たな発展を獲得するものでもなく、中小資本の正にその限りでの暴力的解体(生産手段のストラップ化)と巨大独占体の生産—操業の停滞として恐慌を長期化するのみで、そしてそれ故に、まさに階級闘争を激化させるのみで不均等な発展と不均衡性の根拠である過剰資本は処理されはしない。その過剰資本は不均衡性の調整機構を失い、一層資本過剰—過剰資本を慢性化し、何らの資本主義的解決を与えられはしない。それ故に列強は、金本位制からの離脱—管理通貨制を杆にニューディール政策やナチス経済政策を典型としつつ、諸統制経済を媒介しつつ、その資本主義の根本的解決である勢力圏確保—プロテクト、再分割戦を通じて、枢軸国対連合国の帝国主義間強盗戦争を展開した。ニューディール経済やナチス経済は、金本位制からの離脱を通しての管理通貨制への移行をてこととして現代帝国主義の資本過剰を根拠とした恐慌の長期化—激化の根拠である資本過剰の慢性化—投資と生産の停滞に対して、独占の高度化—金融寡頭制の強化を通して国家が金融資本の運動の中に引き込まれ、国家の経済的役割(銀行券の発行、政府支出、財政投融資、貿易や為替の管理等)を強化し、投資と生産を促進し、対外資本輸出—勢力圏形成に向けさせるのである。ニューディール経済やナチス経済は帝国主義の段階の本質運動を促進し、助長する媒介的経済活動であって、それ自体が単独で現時的形態的なるものでは全くない。だが、これらを媒介してのみ恐慌を短縮し、その激化を緩和し、資本の自律的運動を促進し、ここに於いて初めて、「恐慌」が克服し得る程度は深刻でもあったのだ。

恐慌による中小資本のストラップ化、大独占の生産調整を通じた管理価格の維持—資本過剰は、それ自体に於いて投資と生産を停滞させ、これは労働者人民への首切り、合理化強化、政治的権利の剥奪として世界武装プロレタリアートの高次自然発生性を促進し、革命的危機を形成し、個別資本による自律的解決を階級闘争の激化との一体化に於いて限界のものにし、国家の政治、経済的役割に助長されて帝国主義段階の資本主義的矛盾の唯一の解決—帝国主義強盗戦争に突き進んだのである。

ここで注意しなければならぬ帝国主義戦争の性格は、帝国主義間の対立を米、英帝を軸としつつ、恣意的、政策的にその初期に於いて、ワイマル—ヒッ

エルサイニ体制の堅持を通じた独プロ同盟への反共包圍網として歪曲した
ことである。更に、ナチス政権成立後も米、英はヒットラーのソ連侵略に反革
命戦争として誘導し、ナチスも又当初それを追求したこと、にも拘らずソ連の
後退故に全面的連合国、ソ同盟対独国プロットの帝国主義強盗戦争へと
発展したということである。

列強ブルジョアジーは、侵略と反革命の不統一に悩まされざるを得なかったの
である。とりわけ、独帝はこの矛盾を全面的におこわったのである。

(2)金本位制の再建→崩壊→恐慌→管理通貨制→国家の新しい経済的役割→帝国
主義強盗戦争

段階的本質の一層の深化とその現形形態の発見——

A 経済法則性と階級闘争

我々には現代帝国主義の生成から第二次帝国主義戦争に至る迄の生成→発展
を大雑把に概括し、これを通してレーニン帝国主義の一層の発展的貫徹を過渡
期世界の階級闘争の特質を一方に於いて捉えつつ、④金本位制の再建→崩壊
⑤恐慌の成因、性格、⑥管理通貨制と国家の新しい経済的役割、⑦帝国主義強
盗戦争として概観してきた。

ここではレーニン帝国主義の段階的基本運動法則を踏えつつ、これが如何に
過渡期社会に貫徹したか、他方でこれと過渡期世界の高次の階級闘争とが如何
なる統一した関連をもち、この段階的本質運動に媒介されて展開されるかをみ
ていこう。

即ち⑥独占の高度化→資本の過剰化→資本輸出→不均等発展と不均衡性が、
それ自体として経済法則的に貫徹し、④⑤⑥として展開するかを、④これに
基底要因をもちつつも、相対的独自の性格で、世界武装プロレタリアートの自
然発生性が、逆にその基底要因を深化、変型し、発展させるものとして統一
的に捉えつつ解明して行こう。

——独占の高度化→資本の過剰化→金融寡頭制の強化→不均等発展・不均衡性
を貫く論理——

レーニンはその帝国主義論に於いて、①生産の集積と独占②銀行の新しい
役割③金融資本と金融寡頭制④資本輸出⑤資本家団体の世界分割⑥列強の間で
の世界の分割として金融資本と帝国主義の運動を解明している。

独占を築いたのである。恐慌、信用はその媒介機構であり、ヒルフアーディ
ングの如く、流通から説かれるものでは決してない。又宇野経済学の流通主義
の一派の如く、流通関係からのみ説かれるのではなく、生産を基礎に流通を
媒介にして帝国主義は解明されるのである。
ところで生産に於いて確立された独占は、その運動過程として解明されねば
ならない。

ここに於いて、独占の高度化と独占価格との発展としての管理価格獲得に於
ける金融独占の利潤追求は、生産→消費の自然的関係に対して、一定の関係を
もつての独占価格を維持するには、資本→生産規模の拡大を前提としつつ、稼
働資本以上にふだんに資本を有していなければならぬし、且つかかる資本を調
達しうる資本調整機構を有していなければならぬ。これは株式市場の発達を媒
介にしての独占の高度化と金融寡頭制の強化に於いて与えられていた。何故な
ら、これを通してのみ生産を自由に調整でき、変動する需給関係に独占は利潤
を自由に獲得しうるのである。他方このことが益々農業、中小資本の矛盾を不
断に深めることになるのであるが、かくして独占の高度化→金融寡頭制は巨大
金融独占に於いて断絶に資本の過剰化を生み出すのである。

⑩国内に於ける不均等性からの不均衡は、中小資本、農業部門にとって危機
であり、断絶に小恐慌を永続させ、謂ゆるブルジョア社会の「混頓状況」は強
めはすれ、巨大金融独占にとっての利潤追求には何の関係もないものであるば
かりか利益となるものであり、かくて巨大金融独占にとって、国内の不均等発
展での不均衡性は克服されたのである。だが国民経済の中で生まれ出て、巨大金
融独占は金融寡頭制を通じて国民経済を自己のもとに統合しつつも、他帝国主
義列強も又そうであったが故に、国家間の国民経済の不均等発展（資本の過剰
化の）不均衡性を克服するわけにはゆかない。何故なら金融独占は、世界市場
と国民経済から自由競争を通じて生まれつつも、にも拘らず国民経済を総括す
る国家を媒介にして世界市場をも前提にしているのである。だから独占は、国
民経済と国家を離れては自己の世界性を貫徹することができないのである。国
民経済とその巨大独占体の資本の過剰化とその不均等性は克服しえず、本質的
に世界市場の再分割戦か不均等性からの恐慌に於いて解決する以外にはない。
だが不均衡性からの世界恐慌は、不均衡性を自然的自動的に調整するものでは

彼は四章に於いて、帝国主義に於いて①巨額な「資本の過剰」が生じたこと
②この「資本過剰は、資本主義と資本の本性からして金融寡頭制を媒介に、農
業の発展や大衆の生活水準を引き上げることに使われず、より高い利潤を求め
て外国に、とりわけ後進国に資本輸出される」（角川、帝国主義論P87-88）
と述べている。更に第一章に於いて「恐慌が現に起こり、起る可能性を排除し
はしない」ことを指摘しつつも、同時にこの恐慌は「集積と独占への傾向を強
め」「中小資本が苦境に立ちつつも合同した巨大企業には全然襲かないことを
指摘している」（P41-42）

第一次大戦以降、レーニン帝国主義段階以上に重化学工業化→耐久消費財部
門への拡大として、カルテル、トラスト、シンジケートは発展し、金融独占の
高度化は決定的飛躍を遂げた。そして金融独占は国家との人的結合を深め、金
融寡頭制は国家を占有したのである。

金融独占は自らの利潤追求運動に、国家の政治→経済活動を呑み込み従属せ
しめた。かかる独占の高度化と金融寡頭制の強化は次の三つの事態を促進せし
めた。

その第一は資本の過剰化であり、第二は産業・個別資本の不均等発展の不均
衡性は、独占の高度化、金融寡頭制の強化によって恐慌等に特徴を見る資本性
矛盾を拡大しつつも、独占の危機には至らないこと、換言すれば、独占の危機
は国家との結合を媒介に、国家間の不均等発展の不均衡性に転化集中されるこ
と、第三に「社会的混頓状況は深化し、プロレタリア人民への矛盾の転化は一
層強化し、謂ゆる「金融資本の絞殺」が、国際的・国内的にプロレタリアート
人民へ深化→拡大したことである。勿論これはレーニンが指摘する如く、帝国
主義段階の基本的特質であり、その特質の深化でしかない。

だが我々がこの点を踏えおくことは、現代帝国主義を解明する上で必須で
あり、又恐慌革命論者の流通→危機論主義を粉砕する上でも重要であるから
だ。

④独占は独占価格をもって産業資本主義に於いて、生産と消費の関係を通じ
て自然的所与の關係としてあった市場価格を自らでもって強制した。これはま
さに、自由競争が恐慌と操制的資本形態→株式と、株式市場の発達を媒介にし
て、産業資本から独占に転化したことに根拠を置くことである。「自由競争が

あれ産業資本主義段階の如く資本の自生的発展を促進するものではない。何故
なら部分的に一国的恐慌の規模での利益は与えられたも、それ以上に巨大金融
独占は世界市場を前提としてのみ成長する段階であるが故に、世界市場の統一
性の崩壊、世界市場の縮小からの利益は決定的である。

かくて帝国主義段階に於いて資本の世界性と一國性の矛盾は極限化し、資本
主義的解決に於いては純粋に資本の暴力性の政治的表現→帝国主義強盗戦争に
於いてしか解決しえず、他の別の解決、発展した生産力に見合った生産関係の
根本的世界的解決→プロレタリア世界革命を待たねばならぬのである。独占の
高度化→金融寡頭制の強化→不均等発展と不均衡性は帝国主義戦争を通じて階
級闘争を通じ別の形で解決を準備する。即ち過渡期世界に於いて世界武装プロ
レタリアートの世界同時革命→世界革命戦争を登場させるのである。

それ故不均衡性の是正は国家とブルジョアジーにとって死活であり、世界市
場の擬制的統一性を最大限、不均等発展の利害対立の極限にまで帝国主義段階
に於いては維持せんとし、ロンドン金融市場を中心に調整機構を発達させる
のである。だがレーニン帝国主義時代の金融資本は若々しく、成長期にあり、
その中にプロレタリアートを包摂した故に、未だ自らを対自化（他帝国主
義とプロレタリアートへの二重の意識性）しえていず、帝国主義相互の無政府
的競争に自然発生的に突き進み、金本位制を自らの手で打ち砕いたのであ
った。

現代帝国主義をして一層不均衡性の拡大とその統一性の獲得が要求されたこ
とは、以下の事柄と二重化されて要求されていた。即ち第一次帝国主義闘争
を経て再分割された世界市場を前提とし、帝国主義戦争を通じて資本主義の矛
盾の対立物→世界革命と、その対象化されたロシア革命とこれを媒介とする世
界武装プロレタリアートを現に経験し、対峙し、総括したブルジョアジーにと
って、まさに死活であり、対自的に国家間の過剰資本の不均等発展の不均衡性
を是正すべく金本位制を再建せんとしたのであった。かくて、金本位制は、帝
国主義にとって目的意識的に再建されたのであった。同時に西欧帝国主義は、
これを基礎に米帝を引きずり込みつつヴェルサイユニール体制を造り出
したのであった。

だが、米帝と西欧帝の過剰資本の不均等発展と、不均衡性の増大、これはと

第4章 過渡期世界とプロレタリア・党

序節 — その歴史的展開 —

我々は既に第二章に於て過渡期世界を単に「現代帝国主義と現代過渡期社会の併存する資本主義の帝国主義段階から、世界プロレタリア独裁への過渡」であるとする、それ自身正しいが、変革主体抜き客観主義的、解釈主義的立場とは異なること、そして又過渡期世界のプロレタリアを三プロックバラバラに分けて扱え、その算術的総和に於て扱える立場とは異なることを明らかにしてきた。そのような立場からは結局のところ実践的には一國プロレタリアの算術的総和としてしか、或いは理念としてしか世界プロレタリアを扱えることができず、世界党はせいぜい世界プロレタリア世界社会主義—共産主義の宣伝と啓蒙としてしか位置付けられず、スターリン主義に屈服—変質していくものに至らざるをえないのである。

我々は過渡期世界を、それ自身、世界プロレタリア世界社会主義へと変革すべき変革主体としてプロレタリアートの世界的な存在様式—自然発生性とその内的矛盾の対象化された世界として扱え、従って過渡期世界の変革—対象変革自身を、同時にこのプロレタリアートの内的矛盾の止揚—世界の階級への形成の運動として扱えるが故に、現代の階級闘争を世界革命戦争—世界プロレタリア独裁—として、即ち三プロックに分裂したその歴史的個別的過渡的存在形態を不断に単一の世界プロレタリアート—世界プロレタリア独裁へと止揚する闘いとして扱えるのである。まさにここに根拠をもつて世界社会主義—共産主義をめざす世界党が、単に理念と宣伝としてではなく、過渡期世界の現実の階級闘争の世界的「ゲゲモニー」して形成—存在するのであり、プロレタリアの自然発生性と結合—目的しうるのであり、現代世界のプロレタリア階級闘争として不可欠的かつ目的意識性として扱えるのである。従って又党形成と階級形成の連関構造とその組織形態をも明らかにしうるのである。かかるものとして初めて共産主義へと

永統的に接近し実現してゆく現実の運動が可能となる。

勿論、だからといって我々は過渡期世界をプロレタリアートの主体の一面においてのみ扱えるものではない。過渡期世界の矛盾の展開を根底に於いて法則性として規定しているのは現代帝国主義である。(かかる意味で過渡期世界は歴史的な社会発展段階としては資本主義の帝国主義段階であり、体制間矛盾論と根底的に異なるのである。)従ってプロレタリアの三プロックへの分裂の歴史的個別的過渡的限界性を止揚し、世界革命戦争を通して単一の世界的階級へとその団結の質と形態を進展させ、世界プロレタリアの自然発生性をおし上げる客観的根拠も、この現代帝国主義の全世界的矛盾の成熟と展開の内にあるのである。だが、我々は我々の実践の問題をこの客観的根拠に解消してしまおうとは客観主義であり、それは不断に自然発生性への拝跪—自然成長の革命論へと転化していかざるをえないものとして扱える。現代帝国主義の全世界的矛盾の成熟と展開は、過渡期世界のプロレタリアの存在形態を危機に陥し入れ、その内的矛盾を成熟させ、かかるものとして三プロックの歴史的個別的過渡的存在形態か、その止揚かを暴力的に結着付ける時点に達させる。そしてそれはプロレタリアの世界的な暴力闘争を必然化し、ブルジョアジーの世界的暴力的攻撃との闘争へと引き入れつつも、自然発生性それ自身では解決しがたい危機に達する。(かかる意味で過渡期世界の危機とは世界階級危機に他ならない。)そうであるが故に我々の実践は、それを目的意識的に世界革命戦争を通して世界の階級—世界プロレタリアへと不断に止揚してゆく世界的「ゲゲモニー」して形成—存在しなければならず、これを媒介としてプロレタリアートを初めて帝国主義の打倒—過渡期世界の変革へと突き進み、世界プロレタリアを転回点として世界社会主義—共産主義へと到る新たな歴史時代へと突入することができるのである。我々はこの実践の中心環を、「国家と世界革命」の問題として、即ち帝国主義国家の危機として総括される世界階級危機と、それを止揚する「ゲゲモニー」が、資本制分業社会の社会的—政治的存在様式を意識的にこえていく階級の結合形態を世界性—社会性—暴力性として体現し、ブルジョア国家の枠を突き破り、これを媒介として、原理的に指定される世界プロレタリアートと世界ブルジョアジーの階級闘争が世界革命戦争として現実形態化するものとして指定する。

① 近代プロレタリアートとマルクス

一八四八年の革命の敗北の総括の後に、現実の資本主義の法則性の解明—近代ブルジョア社会の解剖を通して、マルクスはその変革主体としての近代プロレタリアートの形成を見出した。資本論24章(本源の蓄積)—直接的生産過程の諸結果で指定され、資本の蓄積の発展と矛盾の展開のうちに形成—発展させられていく近代プロレタリアートは48年迄哲学に抽象的に扱われていたプロレタリアートに対して、より具体的現実的存在として、その客観的存在の仕方それ自身の中に持つ矛盾によってその革命性が規定される存在であった。主観的生产力という存在形態のうちに、労働力商品所有者—私の商品所有者というブルジョア的存在と、機械制大工業の世界的発展と共に付与される世界性—普遍性—組織の全体性を、プロレタリアートが、資本の有機的構成の高度化—恐慌—資本主義のより世界的大規模な発展という資本主義の展開過程に内的に規定されつつ前者の止揚と後者の現実的獲得へと到る階級形成は、現実には資本制分業社会—市民社会と国家の連関関係に於て、ブルジョアジーの政治権力の打倒—プロレタリアートの国民的階級への転化を通してのみありえたのである。それが客観的には、恐慌—資本制分業社会の動揺—政治権力をめぐる闘争(現実にはロシアンナーリズムとのドイツ及び東欧諸民族の民族闘争を含めて)として指定されたが、そのためには自らを組織されたプロレタリアートとして形成していかなければならなかった。そしてまさにその出発点として、近代プロレタリアートは自然発生的に自己を労働組合へと組織したものであり、この点でかつての本源的蓄積過程で生み出されてきた未だ貧民的存在とは明確に区別されたのである。

マルクスの闘いはまさにこのプロレタリアートとの関係において、この自然発生性の新たな質に依拠しつつ、一方では古い貧民の残滓から生み出される自然成長性—無政府主義との闘争を、他方ではこの新たな自然発生性の質が作り出す自然成長性—トレド—ユニオンズとの闘争を通して、労働組合の団結を止揚したプロレタリアートの政治的組織化—プロレタリア党の形成をおし進め、それによって民主主義のための闘争—国民的階級への転化—政治権力奪取を準備したのである。そして自らをこのプロレタリア党形成の前衛として、科学的な社会主義—国家理論の完成へと集中した。このマルクスの闘いはその頂点

この歴史の客体からそれ自身の矛盾の止揚を通した歴史の主体への転換を、世界的運動組織構造としていかに形成していくのか、ここに攻撃型階級闘争の本質的根拠がある。我々はこの帝国主義とプロレタリアートの矛盾、その相互の危機の世界プロレタリアート—世界プロレタリア独裁への止揚を統一的視点にして、その道程—世界革命戦争を戦略—戦術として具体化しなければならぬ。綱領はこの世界的「ゲゲモニー」—世界社会主義、共産主義の「ゲゲモニー」の過渡期世界—世界革命戦争—世界プロレタリア独裁の中に具体化された内容と存在形態を明らかにするものとして確立されねばならない。「過渡期世界—プロレタリア・党」はその立脚点であり、この党—綱領—戦略—戦術—組織を規定する規程である。

第一節 マルクス・レーニンの実践とプロレタリアート

我々はこの「過渡期世界とプロレタリア・党」に関する世界史的転換点をロシア革命と第三インターの成立に於て扱える。何故ならロシア革命が、プロレタリアートが歴史的に到達した最高度の団結の質と形態を表現し、このプロレタリアートの武装権力—支配階級としてのプロレタリアートの世界の一角への出現でもって、帝国主義の崩壊とプロレタリア世界革命を開始されたこと。と同時にヨーロッパ、アジアのプロレタリアートの、ロシア—国革命の過渡性を止揚すべき世界的闘争が、ロシア革命の団結の質と形態を、世界的階級としての団結の質と形態へと止揚する質を内包して登場し、それに根拠をおいて第三インター—世界党を生み出したことも、世界革命の挫折が同時にロシア革命そのものの中途挫折の結果し、労働者国家形態を必然化し、更に第三インターの変質からソビエト—ロシアの変質にまで転化して以来、この転回は決定的なものとなったのである。このロシア革命—第三インター—その変質以来、レーニン主義の発展と、その歴史の限界の止揚が問われてきた。「プロレタリア革命は根底的、徹底的であるが故に、その中途半端さ、不徹底さは、その故に挫折や敗北の結果し、それを根底的に止揚し、のりこえることによってしか前に進めない」のである。

我々はこのロシア革命—第三インターに於る世界史的転換の内容と意味、以降の歴史の展開と成熟を明らかにする為に、まずマルクス及びレーニンの実践をプロレタリアートの闘いの歴史的段階の中に扱っておこう。

において71年のパリコミューンの出現とその敗北をもって近代プロレタリアートが階級として到達する地点にプロレタリア独裁の存在形態を解明し、その敗北を通してプロレタリア党が現実化し社会民主党へと到ったのであり、プロレタリア党—コミューン(ソビエト)として、プロレタリアートの階級形成が指定され、これに到る現実の闘争として社会民主党—労働組合—民主主義の為の闘争が位置付けられたのである。

②組織されたプロレタリアートとレーニン

大不況期から始まった産業資本主義から帝国主義への移行は、20世紀初頭に世界の分割の完了として、帝国主義は世界的段階として成立した。他方プロレタリアートも、自らを労働組合—社会民主党へと組織し、更に議会の中に大きな地位を獲得していったのである。

だが帝国主義の下では、国家と市民社会の関係はもはや産業資本主義のように資本制分業一般と政治の関係ではなく、独占—金融資本—金融寡頭制の実体的体系と金融資本による国家機関の掌握、そして国家と市民社会を媒介する物質力としての軍隊の膨張—帝国主義軍隊という体系的実体性をもって登場したのである。

ここにプロレタリアートの民主主義の為の闘争—国民的階級への転化—政治権力奪取が具体的現実性をもって登場したのである。だがそれは他方では新たな自然成長性—組合主義—経済主義—議会主義、労働組合—政党—議会が独占—金融資本—金融寡頭支配に癒着—包摂されることに基礎をおいて生み出した。レーニンの闘いは、この自然成長性との闘争を通して前衛党を創出し、それをテコとして民主主義の為の闘争—全人民の武装蜂起—権力奪取—プロレタリアートの国民的階級への転化を導くものとして登場した。この前衛党はプロレタリア党一般とは異って、帝国主義社会—帝国主義国家の一体的体系的構造の外に立つ、職業革命家の組織として外から国家と諸階級の関係の領域に介入し、全人民の武装蜂起—権力奪取を意図的、計画的、組織的に実現するものとしてあったのである。

帝国主義は自らの内作り出す矛盾—過剰資本を、国家の対外的暴力に支えられて、資本輸出として外に転化し、植民地獲得競争—世界の分割に對り、分割の完了後も新たな分割—再分割へと転化しつつ、帝国主義列強間の対立激化

第二節 過渡期世界とプロレタリアートと

①ロシア革命と第三インター、世界プロレタリアート

資本主義の歴史的世界的發展の最終的矛盾が、帝国主義列強による全地球上の領土的分割と再分割—帝国主義世界戦争として、爆発し帝国主義と運命を共にしてきた全階級の危機が成熟した時、レーニンの自国政府の敗北から内乱へ—全権力をソビエトへ—10月蜂起に導かれた。プロレタリアートの武装権力による帝国主義の打倒は、10月革命の勝利を転換として、帝国主義の世界的崩壊の現実的開始とプロレタリアートの武装権力による帝国主義—資本主義の絶滅の開始として世界史的転換点となった。プロレタリアートはロシア革命という歴史上登場した最高の団結、その質と形態を媒介に歴史の客体から主体への転換を開始したのである。だがロシア10月革命は革命の完成ではなく、帝国主義の世界的崩壊とプロレタリアートの世界的勝利への決定的転換点として革命の開始であったのである。ロシア革命自身それがプロレタリアートの国民的階級への転化であると同時に、それ自身の内に、それを発展止揚する世界的階級への転化を内包し、要求する革命、それによってしか成就されえない革命であった。事実、ロシア革命は2月以降、シプーリの崩壊—プロレタリアートとプロレタリアートの支援を受ける対抗軸をもった。プロレタリアートは労働組合—労働者—ソビエトの構造をもつて自らをプロレタリアートとして実現し、10月権力奪取を実現する。そしてこの時点から新たな闘争へと突入した。即ち帝国主義ブルジョアジーは世界の一隅に登場した支配階級としてのプロレタリアートに対して反革命連合を結び、ロシア干渉戦争を開始し、帝国主義戦争は侵略—反革命戦争へと転化した。従ってロシアプロレタリアートの闘った「内戦」は世界ブルジョアジーを相手とした革命戦争であったのであり、そのことを通して自らを世界プロレタリアートへと高めていく、世界革命戦争の開始であった。この発展は党—赤衛軍—ソビエトから世界党—世界赤軍—ソビエトへの展開として体现されて、「内戦」に於ける勝利は、革命戦争の勝利として、プロレタリアートを防衛に回らせ、プロレタリアートを攻勢に転化させ、ワルシャ

—帝国主義戦争として全世界的矛盾を成熟—爆発させる。この資本主義の世界性と国民性の矛盾の頂点、その資本主義的解決としての再分割戦争は組合主義—経済主義—議会主義を社会排外主義へと転化した。だがそれは次の点がふまえられれば同時に内乱の条件の成熟であった。即ち戦争は帝国主義国家機構の内による国民的生産力を集中し全人民を単一的に結合し武装させること、そして戦争による自国帝国主義の敗北は、この帝国主義国家の集約力と国家機構を崩壊させ、それと共に社会排外主義を崩壊させることである。そしてこのことによって前衛党とプロレタリアートとは全人民の武装蜂起として結合しうる。社会排外主義との闘争、帝国主義戦争を内乱へ、自国政府の革命的敗北、それがその戦略であり、内乱—武装蜂起、権力奪取は戦術論として、国家と革命へと高められたのである。この場合「帝国主義戦争を内乱へ」は一国と世界を同質に貫く内容であり、世界革命は内乱の世界的連鎖、結合であったが、現実には帝国主義の弱い環—ロシアに於ける革命—ロシア革命のヨーロッパへの飛火、連鎖的波及—世界革命として想定されていたのである。これはロシア革命として事実としてこのような形態をとるのであるが、逆に事実として出現した時、そのことによって第三インターはこの世界性に現実的に体现すべく飛躍—レーニンの戦略の止揚を要求されたのである。この問題は「国家と革命」に至る時、更に顕著に現れる。プロレタリアートの権力奪取の戦術論としての実践的意味をもっている「国家と革命」は、同時に権力奪取後のプロレタリア独裁の国家の問題を内包するのであるが、プロレタリア独裁の国家—死滅しつつある国家(基本規定ではプロレタリア独裁は世界プロ独として始めて実現されるのであり、その意味ではプロレタリア独裁は世界プロ独として始めて実現されるのである)そうであるが故に国家と革命は、国家と世界革命として世界革命としての国家の揚棄—国家の死滅へと高められねばならなかったのである。このような戦略、戦術論の発展は、当然にも前衛党それ自身の再指定を要求するものであり、プロレタリアートの存在形態の新たな発展、成熟に根拠をおいて、新たな自然成長性との闘争による世界党の問題が指定され、形成されねばならなかったのである。事実第三インターが世界第一党として登場したこの中にこの問題は提出されていた。

ワ進軍と、他方でのヨーロッパ・アジアプロレタリアートの革命闘争の発展、成長、激化—革命情勢として成熟した。かかる意味ではレーニンの、帝国主義の弱い環—ロシアに於ける革命—ヨーロッパ・アジアへの革命の連鎖的飛び火、波及の展望は現実化した。しかしそれはロシア革命の飛び火波及、一国革命の波及、連続、集合—世界革命としてあったのではなく、ロシア一国革命を発展止揚する(ブルジョア国家の廃絶と死滅しつつある国家の樹立というプロレタリア政治革命の本質を実現する)闘い、各国の革命や革命情勢を世界プロ独へと止揚実現していく、プロレタリアートの世界プロレタリアートへ向けた単一の革命闘争であったのである。言い換えれば各国プロレタリアートの権力奪取への要求は、世界プロ独への質を内包したものである。又そのことによってしか成就されえないものとしてあったのである。(植民地に於ける民族ブルのヘゲモニーによる民族独立闘争から、プロレタリアートのヘゲモニーによる民族解放闘争への発展転化も、この世界史的転換の一環、世界プロレタリアートに向けた闘いの一環としてあった)事実、世界階級闘争はまさにこの時点で、帝国主義のロシア干渉戦争—ロシア—ポーランド戦争に端的に表現されるが如く、不断に世界階級戦争へと転化していくものとしてあった。

第三インターは二つに根拠をおいて成立した。この世界第一党はプロレタリアートの闘争が内包している世界的質を意図的に体现する「ヘゲモニー」として、それを媒介としてのみプロレタリアートが自らの内に内包している質、団結を実現しうる「ヘゲモニー」としてあったのである。この世界党のヘゲモニーは、その物質力として、ソビエト—ロシアの赤軍の、世界赤軍への端緒的転化として実現され始めていた。だがこのことはレーニン主義の発展、止揚を要求した。一方でプロレタリアートの国民的階級への転化—各国の権力奪取の為の闘争と、他方でのそれ自身を止揚する世界的階級への転化—世界プロ独の為の闘争の、同時的遂行と実現、その党—戦略、戦術—運動組織形態が要求されたのであり、「何をなすべきか」—「帝国主義論(帝国主義戦争を内乱へ)」「国家と革命」の総体が発展止揚されねばならなかったのである。即ち、党が一国的な革命闘争をこえ、従って、更にはプロレタリア独裁の国家をこえた世界党へと形成されつつ、そしてこの世界党によって意図的に組織され、主導され、

代行し、コミンテルンがその道具として転落した。それと表裏の関係をなすクラクとの妥協—工業化改革の強化—反対派の粛清—国家の絶対化であった。ここに過渡期世界のプロレタリアートの内的矛盾に対する新たな自然成長性—高次のブルジョア性は、スターリン主義として物質力をもって定義し、ソヴェト・ロシアのスターリン主義党官僚独裁へと変質していったのである。

20年代半期相対的安定期は現代帝国主義の生成とスターリン主義の形成をもって帝国主義とプロレタリアートの新たな世界的相互関係をより出した。だがそれは未だ初期的な、従って動揺的なものであり、そうであるが故に、そのあらゆる不均衡さは未曾有の世界的矛盾とその爆発へと至ったのであり、それを通過して過渡期世界は全世界的、構造的に成熟する。

③30—40年代に於ける過渡期世界の成熟

相対的安定期に於ける現代帝国主義の生成は急速に自からの内に過剰資本を成熟させた。しかも独占の高度化—金融資本の発展—管理価格による利潤率の低落の防止策は、この過剰資本を拡大し、生産資本の廃棄や、貸付資本の輸出としては、処理困難なものであった。しかもアメリカとヨーロッパの不均衡、そして再建資本体制とその下での貸付資本輸出によつては解決され難いものであった。29年アメリカの景気過熱の下で高金利によるドイツから短期資本の引き上げによつてさらされた金融恐慌は、再建資本体制の崩壊から世界大恐慌へと発展した。この下での露呈された大きな過剰資本は簡単に処理しないものとして再生産の停滞と不況の長期化をもたらした。不況からの脱出は、まさしく、産業、独占、金融資本の発展と高度化がより出出した過剰資本を処理する新たな機構—資本の回転を形成し、新たな形態の資本輸出とそれを支える機構をつくり出すことによつてしかありえなかったものであり、それは又アメリカとヨーロッパとの、或いはドイツと英仏との不均衡の矛盾の解決を前提としたのであった。プロレタリアの下での不況からの脱出方向は、典型的にアメリカとドイツに現れた。再建資本体制の崩壊、金兌換の停止が貿易為替のアメリカ統制、管理通貨体制への移行によつて、それをテコとした通貨膨脹—国家財政投資による市場創出、それを出発点とする資本の循環の促進であった。こうしてプロレタリアの下に於ける「管理通貨制—通貨膨脹を通して国独資へと転換する。それによつて生産資本の廃棄を伴わない過剰資本と過剰労働力と過剰商品

これらの暴力的解決としての全世界をめぐる再分割戦争であった。かかる世界の再分割の中に、「労働者国家」も不可避的に対象領域へと包括されることによつて、その内部に特殊な様相—世界的な反革命戦争を独—日帝国主義の世界的位置を媒介して付与したのである。

更に、ファシズムの問題に言及すれば、ドイツの典型性に注目する余り、恐慌によつて引き起される小ブルの自己権力運動をテコとする金融資本のプロレタリアートに対する暴力的テロの独裁として把握されている通説は、明らかに一面のみにある。むしろ過渡期世界に於ける現代帝国主義が、その過剰資本の処理を、一方では統制経済—軍事経済をテコとしつつ、他方では戦争として発現し、それがその国際的位置からして、他帝国主義に対する再分割戦争と「労働者国家」—民族解放戦争に対する反革命としての、侵略反革命戦争—世界秩序の変更として展開し、この方向へと予防的先行的にプロレタリアートの粉砕—巨大金融資本とその同盟者による帝国主義軍隊を基軸とする権力形態、反共反革命民族主義（国家主義をこえた人種主義的民族主義ともいうべき）イデオロギーによつて統合していく政体として扱われなければならない。それがドイツでは恐慌—都市小ブル、失業者、小ブルの自己権力運動（その政治的イデオロギー的内容が反ヴェルサイユ、反ユダヤゲルマン主義、反共反資本主義の下に、英仏及びソ連に対する敵対とプロレタリアートの反革命的暴力の解体）—ファシズム政権の樹立—これを規定したのはブルジョア—ソ連の弱さに他ならない—その下での統制経済—軍事経済の実現と、局地的侵略反革命戦争の展開（東欧の解放戦争の未成熟がそれを電撃的にしたに過ぎない）—反革命世界帝国主義世界戦争という過程をたどつたのである。日本は恐慌と同時に侵略反革命戦争（満州侵略）を開始され、それによつて統制経済—軍事経済へと転化していき、金融資本—軍部—天皇制絶対主義官僚—農民が、天皇制イデオロギーの下に結合し、プロレタリアートを粉砕し、アジア主義でもって反革命世界帝国主義世界戦争へと転化していく如き、戦争—統制経済、軍事経済—権力再編が同時一体的な崩壊的に進行し、反革命世界帝国主義戦争へと転化していったのである。このドイツと日本の相違は、ワイマール体制プロレタリアの弱体化と国防軍の独立化と大正デモクラシーの相違（天皇制絶対主義権力の先行的代位的な手段としての性格）、プロレタリアートの強弱、ドイツの重化学工業

を処理、回転させるメカニズムをつくり上げていくのであるが、それは、世界的な資本及び商品流通の分断の下では、不可避的に軍需投資—軍事生産へと至らざるを得ない。絶対消費財—軍事生産による価値破壊—軍事経済へと転化していくのである。

この国独資の典型的な展開として、ニューディールとナチス経済が生まれたのであるが、その相違は次の点にあった。豊作物の巨大産出地であり、豊富な原料資源をもち、それ自身に於いて広域市場として成立しているアメリカに於いては、国家による市場創出によつて管理価格を維持したまま資本の回転が促進され、農産物についても価格の下落に対する補償金によつて再生産が維持され、賃金についても最低賃金の導入によつて価格維持がはかられ、（それはインフレーションによる再収奪と国家—独占資本への転化を同時に併行してあったのである）全体としてな崩壊的インフレーション—価格の維持上昇とであった。しかし原料資源—食糧を外国市場に依存してきたドイツでは、不況からの脱出—再生産の拡大過程から原料資源、食糧の確保を要求され、通貨体制の崩壊とマルクの価値下落の下では、又伝統的に独仏英の勢力圏争いの焦点であった東欧—バルカン—中近東への依存の下では、その暴力的確保—アウタルキー—経済圏への統合へと進み、その内部に於て、資本—労働力—価格に対する強力な国家統制へと転化し、このアウタルキー—経済—統制経済を軍事経済へと転化していった。そしてそれは必然的にこの経済圏の暴力的拡張として本国と植民地との商品—資本の流通—対外的封鎖へと転化していった英仏との暴力的衝突をつくり出し、ソ連の国防政策との衝突をつくり出し、この戦争の拡大による価値破壊を通して軍事経済—統制経済が維持拡大していくという構造をとつたのである。このヨーロッパの戦争は、同時に軍事経済へと転化し始めていた米帝の参戦を必然化し、アメリカも又戦争による価値破壊—軍事経済の発展—統制経済への転化の構造をとり、アジアに於ける日米間の再分割戦争をつくり出し、この戦争は、管理通貨体制をテコとした国家の資本循環過程への介入による過剰資本と過剰労働力の回転—軍事経済への転化から、戦争による価値破壊—過剰資本の暴力的解決による軍事経済の発展であると同時に、より根底的に、ヨーロッパと日本とアメリカの不均衡、ドイツと英仏の不均衡、更には20年代に近似的発展をとげ、大きな過剰資本を蓄積した、アメリカとドイツとの対立、

化の進行と日本の破局的性格—同盟者、小ブルの性格と役割りの相違によつて明らかになったのである。

他方この30年代—40年代は、プロレタリアートの世界的自然発生性が、それ自身の内部から生み出された新たな自然成長性の物質力をもつた完成によつて解体されつくし、帝国主義の腐巧性に一体化されると共に、これらをはこべる新たな自然発生性が端緒的に開始され、戦後世界の開始となったのである。それは17年ロシア革命と第三インターの成立をもつて始まった、世界党形成—世界プロレタリア独裁に向けた運動が最終的に崩壊し、民族国家への集約を媒介として、その内部に解決され難い矛盾が世界的に崩壊し、民族国家の崩壊として発現すると同時に、他方では民族国家への形成そのものを資本主義とプロレタリアが遂に表現しえなくなることによつて、プロレタリアートの革命戦争として成熟し、それ自身民族的（解放闘争）であるにもかかわらず、その内部に新たな世界性をはらみ、世界革命戦争としての永続性を内包した闘いとして登場し、過渡期世界と現代帝国主義とプロレタリアートと党の新しい時代の出発点となったのである。我々はこの過程を29—34年、34—38年、38—43年、43—49年として総括する。

中国革命敗北後、ネップ政策から工業化政策へ強行的に転化し、階級矛盾の激化の官僚的のりきりを27—29年合同反対派の抹殺をもつて、農民の抑圧をソヴェト民主主義の圧殺として遂行したスターリン派は、このソヴェトの内戦以降最大の危機ののり切りの世界政策を、もはやソヴェト国家政策の道具へと転化したコミンテルンを通して、とりわけドイツに於いて、ヴェルサイユ協約政策をとる社民に対する主要打撃、国防軍との秘密協定と中立化、ヒトラーとの協調によつて、ワイマール—ヴェルサイユの動揺と崩壊に向けての、攻勢的戦略を、29年恐慌の情勢に対して展開した。この下でのドイツ赤色戦線は恐慌の矛盾をまずもつて集中された下層労働者失業者を基盤に、自衛武装を先行し、勢力を拡大した。だが29—34年の過程とは、世界的な階級危機がドイツに行的に凝縮して現れた「前段決戦」の時期であったのであり、ヴェルサイユ体制の矛盾に対して、ソ—東欧—独—仏を単一の革命闘争へと統合する世界戦略、その下に単一的に結合し、それを担うヘゲモニー—世界党の下に、ヨーロッパ—プロレタリアートを結合させ、この国際主義—世界革命戦争への闘いを、ドイツ

ソの権力問題 権力闘争の中に具体化し、赤色戦線の自衛武装を、この権力闘争 世界革命戦争の武装へと、世界赤軍の展望の下に意識的に高め、他方ワイマールソヴェルサイユとファシズムの相剋との内に、権力闘争への統一戦線ソヴェット運動をつくり出し、下層プロレタリアート、失業者、都市小ブルから基幹プロレタリアートへと闘いを持続、波及・拡大していく、これにソヴェット国家の対外政策を利用することによって勝利が可能であったのである。コミンテルンのソヴェット国家防衛の対外政策という民族主義は、ドイツ共産党の民族主義として体现され、それが階級危機 権力問題の経視と日和見主義に至り、自衛武装とセクト主義として表現されることによって、ファシズムに粉碎されたのである。(尚この過程で、33-34年のブリューニングからヒトラーへの転換の時期を前段階決戦と捉え、29-33年をその前段として捉えるスコラ学は、その一國主義と共に、権力闘争に対する無知、無理解による、客観主義的敗北の見解である。29-34年の時期全体が前段階決戦 権力闘争の時期であるが故に、その開始とその勝利を統一的に体现する戦略、しかもそれは、必然的に世界戦略が必要とされ、そのヘゲモニーを実現する党が要求されるのである。

ドイツの敗北は世界プロレタリアートの敗北の決定的第一歩として、ソヴェット内部では第二次五年計画の下で、階級死滅 階級闘争消滅 無矛盾論の下に、国家主義的、枚岩体制へと移行し、36年スターリン憲法として成立した。民主主義的譲歩 少数民族自決と連邦制さえ大ロシア民族主義へおきかえられ、赤軍は全人民の武装の消滅の上にソ連軍として「近代化」され、位階制が導入され、共産党と国家官僚との一体化が進行し、書記長 國家元首を頂点に、スターリン主義党官僚独裁は完成した。それは更に、38年第二次大戦に至る最後の革命ソベイン革命の圧殺と、それと併行した大量粛清によって打ち固められたのである。この「労働者國家」に於けるプロ独からブルジョア的防衛プロレタリアン主義独裁への変質と、民族主義的完成の過程は、旧勢力圏の防衛に向った、英仏帝國主義ブルジョアジーとの同盟、スターリンソラヴァル協定等と、このソ連國家政策と結合した新たな民族主義 人民戦線 愛國戦線(それは同時にソ連と帝國主義軍隊との協調による権力の平和移行論 國家機構構築取路線である)へ、そして第二次大戦前の最後の革命、しかも極めて國際主義

助を含めた戦略的同盟 帝國主義國際政治への「労働者」國家としての登場であり、もう一つは中国、朝鮮、ヴェトナム、ユーゴのプロレタリアヘゲモニー 黨と解放軍を軸とする革命戦争、にもかかわらずその一國の限界であった。その中間にフランス、イタリアのプロレタリアヘゲモニーの未成熟な解放戦争があった。その問題は、マキヤベルチザンが、モスタワに亡命した党中央とは独自に、下部黨員を軸に大衆に結合しつつ、戦闘の中から成長していった点で、スターリン主義をこえて新たなプロレタリアヘゲモニーを形成しつつも、更にバルチザンから党によって意識的に組織されるべき正規軍をつくり出すことができず、連合党に席を譲り、モスタワに妥協せざるをえなかった点で、未成熟であったのである。

大戦の終末から戦後世界の展開への過程は、第二次大戦を通じた帝國主義世界政治の中心軸に登場した米ソ同盟による世界の再編成であった。それは二つの軸をもっていたのである。一つは米帝によるヨーロッパ、日本帝國主義に対する再分割(不均衡の解決)を基盤とした、アメリカで先行的に成熟した現代帝國主義の、世界的展開と成熟への体制である。(この中に各国の管理通貨体制と大戦下での化学工業化への基礎が包摂されていたのである。)もう一つは、ソ連による未成熟なプロレタリアヘゲモニーのソ連「労働者」國家へさす牽を通じての革命 東欧革命であり、これを中心とする國家連合へと変質する結果をもたらしたのである。第三インテリは永遠の過去として葬り去られたのである。

この第二次大戦過程の最終的な終了は49-50年のNATO・安保結成・ワルシャワ条約結成・中國革命の勝利と、中ソ相互援助条約結成であったが、それは又新しい矛盾の始まり、一方では現代帝國主義の世界的展開と成熟の始まりであり、他方ではそれに規定されつつも、プロレタリアートの現代性を止揚する新たな自然発性と世界性の始まりであった。我々はこれらがどの様な今日の世界革命戦争 世界党を準備してきたのかを明らかにし、今日の位置を明確にしなければならぬ。

革命ソベイン革命の人民戦線への変質と絞殺によって、ヨーロッパプロレタリアートは解体され尽し帝國主義世界戦争へと転化する。38年ミュンヘン会談と独ソ不可侵条約は、このプロレタリアートの解体の上に、ヨーロッパをめぐる侵略と反革命の大戦争 ヨーロッパの終末と墮落を告げる弔鐘となった。そしてその墮落の如き静けさの中で、大戦争への恐怖に満ちたプロレタリアートの沈黙の中で、コミンテルンは音をたてて崩壊した。コミンテルンの崩壊と大戦の開始、それは17年ロシア革命以来の一つの時代、世界プロ独に向けた闘いの歴史的 一時期の最後の終りであり、プロレタリアートの死であった。

新しい時代はこれに先立つ35-36年、東方に始まった。毛沢東の八路軍が大長征の後に延安を根拠地とし、抗日戦線を呼びかけ、抗日戦争を革命戦争として開始した時、それはコミンテルンの政策 國民党・共産党合同路線に反対する統一戦線であり、ソ連の東方政策 日ソ不可侵協定に独自の抗日革命戦争であり、更に日米ソ及び中国民族ブルの國際的な協調と対立しプロレタリアートと農民の独自の革命戦争として國際性を内包したものであった。17年以降の世界プロレタリアートに向けた闘いが、プロレタリアートの解体をもつて、変質した「労働者國家」と腐巧した帝國主義民族國家の内に集約され尽した時、同時にそれは未曾有の大戦として民族國家の腐巧せる矛盾を爆発させ、とりわけ先進國民族ブルジョアジーの変質と帝國主義との結合 腐巧として現われた時、民族の独立と統一は、プロレタリアートのヘゲモニーによる民族解放戦争として、更にこの戦争を通して形成されるプロレタリアートヘゲモニーが世界性と系統性を要求するものとして登場し、帝國主義と変質せる「労働者國家」をこえる質をもちはじめ、変質したコミンテルンの政策に反対する革命戦争として開始されたのである。

世界的な転換点は43年に訪れた。ソ連スターリングラード攻防戦に於ける独の敗北、東欧に於けるユーゴ・チトールの人民解放軍の進撃、フランス、イタリアに於ける抵抗運動 バルチザン部隊の反撃と発展、中国、朝鮮、ベトナムに於ける抗日戦争と共産軍の発展等、帝國主義世界戦争内部から世界革命戦争の土俵が成長しつつあった。だがこれは次の様な戦後世界を規定する二重性と限界を持っていたのである。一つはソ連のプロレタリアートの解体、コミンテルン解散の下での、「祖國防衛戦争」米帝との同盟、マヌーバではない、軍事援

④、戦後世界と階級闘争 現代帝國主義の成熟と過渡期世界の新たな矛盾の展開
我々は戦後世界を朝鮮戦争からEECの成立、スエズ戦争を経てヴェトナム戦争に至る世界として捉える。戦後世界とは現代帝國主義が世界的に成熟し、それによって三ブロック階級闘争がスターリン主義をもこえる自然発生性をもって形成され、それが更に単一の矛盾と攻防戦の中に引き入れられることによって、世界革命戦争 世界プロ独への条件を成熟させるものである。言いかえればプロレタリアートが世界的に歴史の客体から主体へと強化していく過程で、主体としての現代帝國主義と、その内部に包摂された客体的存在としてのプロレタリアートという基本関係と、ロシア革命以来これを部分的に突破、転倒してきたプロレタリアートが、にもかかわらず「労働者國家」として現代帝國主義に外的に規定され、依存するという二重の関係が存在すること。だが現代帝國主義の世界的矛盾の成熟は、この二重性の関係の止揚を内包する自然発生性をつくり出し、それらが個別的過渡的に三ブロック階級闘争として体现されるが、その世界革命戦争への統合によって、この二重の関係を止揚するのであり、それを主体に於いて統一しながら実践することこそ今日の目的意識的実践の任務がある。

30年代に於ける管理通貨体制への移行と、大戦を通じたアメリカとヨーロッパ、日本の不均衡の解決 再分割と、戦時経済による世界的な重化学工業化の基礎、これを基盤とし、現代帝國主義として先行的に成熟したアメリカの圧倒的生産力水準、過剰資本、金蓄積を現実的背景として、新たな世界的信用機構 IMF をつくり出した。一方ではそれが各国権力に対する信用関係を媒介にし、他方では資本の循環過程への國家の介入 軍事援助へと転化し、新たな過剰資本の回転のメカニズムを要求し、それ自身國家を媒介させるをえないという点から、國家資本輸出 過剰商品輸出 高価格による利潤率確保というメカニズムをつくり出した。これはいわばニューディール 國際版であり、ヨーロッパ、日本の資本主義復活が基礎付けられ、そして國內需要の喪失、生産能力と市場との矛盾が増大するや、國家資本輸出は軍事援助へと転化し、新たな価値破壊を必然化させた。第一次朝鮮戦争は、戦後恐慌と同時に引き続いたこの新たな価値破壊と緊急を利用した軍事援助、それによる過剰商品処理と過剰

資本の回転、生産資本の廃棄を伴わない過剰資本―過剰労働力の処理であった。戦争のこの現代帝国主義的内容が小ブルジョア三プロットの国際政治の恣意性と同時一体的に進行する基礎には、国際反革命同盟が三プロットプロレタリアートに対する予防的革命的な反革命として存在し、その軍事干渉への断絶の衝動が、国内の軍事経済の構造化と産業複合体と、それに立脚した権力と結合するという関係がある。従って戦争は不断に三プロットの矛盾の焦点で、局地戦と侵略反革命戦争をくり返すという傾向をもっているのである。

だが朝鮮戦争を通して、ヨーロッパ、日本の資本主義が復活を完了し、新たな発展を開始した。その発展とはアメリカに於て20年代以来進行した、エネルギー革命、産業構造の変化、生産財―消費財―流通に至る独占の完了と独占の高度化、金融資本の発展であり、しかもそれが国家金融財政政策によって補完、促進され、生産力水準の平準化であり、米資本主義と同盟の構造への接近であった。この過程はアメリカからみれば、アメリカの対外市場拡大と商品輸出の拡大であり更にアメリカによる後進国再分割、国家資本輸出―商品輸出、そして核開発として、商品―資本の回転のメカニズムが作り出され、国内成長の停滞、クリビングインフレーションが進行した。米帝の全世界への寄生性と腐巧性に対するヨーロッパ、日本の発展として、現代帝国主義の世界的成熟は進行した。

だが58―60年を転機として現代帝国主義は新たな成熟の局面に突入した。即ち一方ではヨーロッパに於けるEECの発展、日本の発展が重化学工業化の完了と巨大独占体市場分割の完了を結果し、過剰資本を形成し、国家の財政投資による市場品、資本の回転のメカニズムをつくり出し、インフレーションを進行させつつ、先進国への商品輸出と、後進国への国家資本輸出―商品輸出の再分割戦への転化という、寄生性と腐巧性の増大―アメリカ型構造へと同質化し、他方ではアメリカが新たな技術革新(軍事投資によって開発されてきた)と固定資本の更新を行ないつつ、それによって廃棄された生産資本をヨーロッパに直接投下し(利潤を生み出す)、後進国への国家資本輸出を削減すると、この方向に転じたことであった。これらの事態は戦後帝国主義の発展と成熟、とりわけアメリカの過剰商品、資本の輸出のメカニズムの機構としてのIMFと衝突し、危機に陥し入れたが、にもかかわらず、それを不可欠の機構とする

かる世界的革命主体を要求し、創出する闘いとして始まったのである。その客観的条件として、一方では帝国主義の不均等発展、ヨーロッパ、日本の強行の発展が帝国主義の一元的な国際政治体制を分解すると同時に、各国の政治体制の変更を要求し、他方では「労働者国家」群の一元的国际体制が、それ自身国家を軸としたものであるが故に、発展の不均等性に媒介されて、国家間の矛盾を顕在化するという関係、単純化すれば不均等発展に媒介された一元的国际政治体制と民族国家の矛盾が各国の政治体制の変更を要求し、逆に米ソにそれに対する国家的対応が、金門、馬祖―スエズへの武力干渉とてまき起こされることによる世界的政治危機への転化という構造が存在した。

ポーランド、ハンガリー、人民公社運動とその挫折、アルジェリア解放戦争―トルコ、韓国の闘争―キューバ革命、フランス、イタリア、日本の政府をめぐる闘争とその敗北、これらの自然発生的闘争とその暴力闘争への転化は、未だ一国的枠内にありつつも、新たな世界性を要求し、その暴力性の組織化を要求した。我々はこれとの関係で旧共産主義者同盟の総括をしておかねばならない。60年に於ける階級闘争のその自然発生的性質は、過渡期世界に於ける世界性と暴力性を内包したものであったのだが、その実現の為に、それを担うべき主体形態であるスターリン主義を止揚し、世界プロレタリア革命の中途挫折とその変質形態をブルジョア国家権力を擁護する階級として組織された暴力としての実現として、世界性と暴力性を国家と世界革命の関連の中に、いかに相互媒介的に実現するかの問題であった。だがこれは自然発生的の延長上に実現されるのではなく、自然発生的自身が体现している二重の性格―帝国主義の世界的矛盾に突き動かされ、それとの対立関係としての政治過程への登場と、過渡期世界に於ける自らの存在の止揚と世界プロレタリアートの表現の要求、その対象性と主体性を党の為の闘争と党としての闘争―党形成と階級形成の二重性として階級闘争総体の中に相互媒介的に実現しなければならぬのである。更に言えば過渡期世界の世界プロレタリア革命の止揚という主体性、その帝国主義の矛盾との結合による現実性の獲得を党―階級に於ける目的意識的実践、自然発生的実践をどの様な結合形態へと高めるものとして展開するのかが問われていたのである。安

現代帝国主義にあって、IMFは手直しの修正で維持されることにより、逆に各国の通貨危機へと連鎖し、各国の国策政策の国際的保障から破綻へと転化してきたのである。かくて世界的に成熟した過剰資本は、65年来ベトナム戦争として処理され、それが激化させる世界的インフレーションは国際通貨体制を動揺させ、一方では国策政策の破綻、統制経済への転化を導いてきたのである。

後進国では45年インドシナ休戦協定から58年スエズ戦争を経て、60年コンゴ動乱に至る迄、一貫してアメリカによる再分割が進行し、その国家資本輸出をテコとした余剰農産物輸出は、後進国に於ける農業からの原始的蓄積部分の系統的な収奪として、農業そのものを破綻、更には石油、ボーキサイト、ウラン等の原料資源の米資本による一貫した収奪へと発展し、民族ブルジョアジーを地主と共に買弁化し、その政治的独立と民族国家への形成を破壊し、帝国主義と民族ブルジョアジー地主によって支えられている軍事政権と、プロレタリア―農民との永続的な政治的分裂をつくり出したのである。

NATO、安保はこの現代帝国主義の世界的発展と成熟に基礎付けられて、各国内プロレタリアート―労働者国家群―後進国革命戦争に対する恒常的な国際反革命同盟として通常軍と核の体系によって維持維持されてきた。かかる意味ではそれはヴェルサイユ体制よりはるかに強固な基盤と広汎な内容をもつていたのであるが、同時に現代帝国主義の世界的成熟と、三プロット階級闘争の昂揚が、この国際反革命同盟と各国帝国主義との矛盾として露呈し、揺さぶり、世界的な政治危機の恒常的深化として結果する構造を、現代世界に付与したのである。

他方プロレタリアートの運動は朝鮮―インドシナ戦争と板門店―ジュネーブ協定による後進国革命戦争の中途挫折、それによる民族国家の分裂に至ることによって43年以来的未成熟な昂揚は一巡し、30年代末の「労働者国家」の変質―先進国プロレタリアートの敗北―後進国革命の中途挫折として完了した。だがそれは過渡期世界の階級闘争、三プロット階級闘争が同一の水準、同一の矛盾に達したことの証明であり、いかなる諸国の、いかなる闘争対象をもつて始まる階級闘争といえども、過渡期世界総体の変革を要求する質をもち、その様な世界性として自己を実現しない限り、勝利も完成もありえないこと、か

保闘争が国家権力の問題に達せず、過渡期世界全体の変革が問われていた時、プロットの△反スター帝国主義論▽革命論△党の為の闘争、党としての闘争▽大衆の自然発生的性といふ連関構造は解体した。プロレタリアートの自然発生的性が過渡期世界総体に対して未成熟であると同時に、それを不断に止揚すべきプロットの実践が遂にこの自然発生的の対自化から一国的としてしかあり得なかつたからである。この連関構造の解体は、戦旗派の主体―反スター哲学―ソ連論と革運派の客体―経済学―現代帝国主義論とプロ通派及び関西派の自然発生的実践―暴力論―政治過程論へと分解し、それら自身過渡期世界の自然発生的の一面化へと転化し目的意識的実践へと止揚する全体との契機を明らかにしたのである。

60年代中葉に於ける現代帝国主義の世界的矛盾への成熟は、その矛盾の強行的貫徹と過渡期世界の三プロットの構造的分裂との間に不可避的な衝突をつくり出した。一方で、三プロットそれぞれ内部に於ける新たな分解と分裂をまき起こすと同時に、他方で三プロットを世界的単一主体へと統合していく焦点―基軸を作り出した。その焦点―基軸は、三プロットの矛盾の集中心に於ける戦争であり、この戦争が三プロットそれぞれ内部に於ける分解、分裂と結合することによって、現代帝国主義の世界的存在形態とプロレタリアートの世界的存在形態を根底的にかえていくにはおかず、それは最後の規模の決戦、戦争に至る必然性をもっているのである。これは、過渡期世界―現代帝国主義が不可避に到達する地点である。

ベトナム戦争をめぐる世界階級闘争こそ、この前哨戦であった。帝国主義列強間の世界再分割戦とIMF再編―反革命同盟再編の開始、中ソ対立の公然化、後進国に於ける反革命軍事クーデターと民族解放戦線への分裂、これが60年代中葉の世界を被った主要な諸事件である。この基盤の上に現代帝国主義全体の凝縮された矛盾の爆発としてのベトナム侵略反革命戦争と過渡期世界に於けるプロレタリアートの存在様式―二重性が固定化し民族国家の爆発としてのベトナム革命戦争があった。自らを国民的階級へと転化した民族国家を形成しようとしたベトナム革命が、それが世界プロレタリアートへと止揚する形式の一過程としてしか達成しえなかつたが故に、逆に世界革命の挫折の下で、米ソの国家間国際協定により、民族的経済基盤は崩壊し尽され、そうであるが故に、民族解放闘

争が帝国主義の侵略、抑圧、反革命と、それとの闘争にのみ共通基盤をもった普遍的闘いであり、同時に分割国家の止揚が過渡期世界の変革に世界プロレタリアートへの形成を要求することが単一の戦争として複合する時、この基盤は同時的闘争の権力闘争と、世界革命戦争の条件へと転化すると共に、帝国主義列強の世界再分割、世界の侵略反革命戦争、なし崩しファシズムの基盤へと転化したのである。

ベトナム革命戦争—中国文化大革命—ゲバラ、中南米ゲリラ—米黒人闘争—国際ベトナム反戦法闘争—日本10/8から88年テト攻勢—米黒人闘争—仏五月革命—西独非常事態法闘争—八月チエコ闘争—日本10/21闘争へと至る世界階級闘争の波、その高度な自然発生性が、同時的闘争の明らかりにした世界性と暴力性は、世界革命戦争への前哨戦として過渡期世界を揺さぶることも、NATO軍—安保管—ワルシャワ軍の反革命軍隊の前に後退し、帝国主義諸列強とソ連の世界的戦略再編の圧力に衝突し、逆に権力問題—世界革命戦争の連関性の中に、この自然発生性を止揚し、党—軍—革命戦線の世界的発展によって、世界的攻勢へと転化するべき再編成が、分派闘争をもつて始める局面を迎えた。

党と軍と革命戦線を萌芽的に同時に一体的に内包してきた新たな戦闘組織の発展は、その限界性と共に、自らを新たな戦闘体制へと再編しなければならぬ。成熟しつつある時代は明らかに第三インターの初期や、30—40年代よりもはるかに広く深く世界的であり、その世界性、暴力性、社会性は、はるかに意識的である。世界革命戦争の条件はすでに成熟し尽くしており、その戦闘の開始が迫っている。我々はその勝利への条件をその戦闘を通してつくり出し、世界党—世界赤軍—世界革命戦線として獲得し、世界プロレタリアートの基礎をうち固めねばならない。世界的分派闘争は不可避的にこの戦闘へと受け継がれるであろう。

第三節 世界革命戦争への現状分析と任務

我々が二節で展開してきた最後の結論は、世界革命戦争—世界プロレタリア独裁への条件の成熟と実践の開始であり、世界党—世界赤軍—世界革命戦線の建設の開始である。我々は二節の総括をこの出発点として完了しておく。

①現代帝国主義の全世界的矛盾の成熟

戦を遂行しこの戦争に於ける力関係を通過して再分割戦を行い戦争によって軍事経済を発展させ、統制経済への転化を成し遂げていく、これが現代帝国主義の世界的矛盾の発現である。朝鮮戦争に始まり、ベトナム戦争に至った戦後帝国主義の世界的発展と成熟は、今その矛盾の全世界的成熟によって、戦争を現代帝国主義諸列強の中に構造的に常態化し始めている。今日の戦争の主要な特徴は侵略反革命戦争である。インドシナや朝鮮や中近東やバルカン等、帝国主義列強間の力関係の再編の焦点をなし、後進国分割戦の焦点と結合し「労働者国家」間の矛盾の接点であり、民族問題が不断の動揺をつくり出し、三プロットの矛盾が頂点を築き、まさにここに於ける侵略反革命戦争が、不断に過渡期世界の構造を揺さぶり再編し、列強間の再分割戦をこの戦争—インフレーション—商品競争をもつて結着付け、政治的軍事力関係を再編し、「労働者国家」間の矛盾を拡大し、帝国主義との力関係を決定し、この戦争を通して三プロットプロレタリアートへの反革命—その暴力的解体と統合を押し進め、勢力圏の拡張と統制経済への転化、軍事経済と世界的価値破壊を追求する点で、それが、例えば局地的であるうと、世界的矛盾は、権力的側面に於いては、なし崩しファシズムと反革命同盟の再編である。なし崩しファシズムとは、ファシズムの前期的表現ではなく、統制経済—軍事経済—再分割戦—侵略反革命戦争のなし崩しの同時一体的な進行を基礎としてプロレタリアートに対する先行的予防的革新革命を通して巨大独占体—帝国主義軍隊—労働者階級の上層部と小ブルジョアジーの一部の三位一体的結合の下に、暴力的支配と統合を実現する体制である。今日国家諸機関の中で軍隊の位置は急速に膨張し、中軸となり、過剰労働力を吸収し、産軍複合体を通して巨大独占体によって掌握されている国家—総資本によって系統的に買収され、国家の中に与えられたその特別的地位でもって労働者を支配し、労働組合を産業報国会化し、この軍隊—独占体—上層部による中央—工場、住宅地域に對する国家の支配機構がつくり出され、機動隊が半軍隊のプロレタリア人民に對する反革命攻撃隊として強化育成され、すべての闘争を暴力的に解体し、小ブルの一部が下からのファシズム運動として別動隊に仕立て上げられる。このような最近的特徴的な傾向は各国によって発展の相違はあるにせよ、又戦後どの程度に民主的であったかに関係なく、普遍的にたどり始めている。

戦争の中から生まれてきたエネルギー革命、技術革新、産業構造の変化は、重化学工業を達成し、原料資源—生産財—消費財—流通に渡る巨大独占体を形成し、産業トラストに基礎をおいた金融—消費財—流通を発展させ、管理価格や自己金融を不可欠の要因—その成熟は巨大な固定資本—生産能力と市場との矛盾としての過剰商品—過剰資本—過剰労働力を形成し、恐慌によつても廃棄されないものとして登場した。そして管理通貨制をテコとする国家による通貨膨張—インフレーション—財政投資による市場創出、それによる資本の循環過程への介入によつて、過剰資本の新たな回転のメカニズムを獲得し、それは最終的に軍事投資—軍事経済へと転化する。こうして作り上げられる産軍複合体とそれによる全国家機関の独占は、金融寡頭制の最も発達した形態である。更に世界の再分割の一定の完了と、その力関係を応じた国家権力輸出の信用に基き、国際的な管理通貨体制をつくり出し、それを通して国家資本輸出—商品輸出—利潤生み資本輸出の、過剰資本処理—資本輸出の新たなメカニズムをつくり出し、それを媒介にして不均等発展を通して現代帝国主義の世界的成熟—標準化と構造的同一質化を実現した。

だが、それは重化学工業部門を中心とする世界的過剰資本の成熟であり、各国が国家の資本の循環過程への介入を通して各過剰資本の回転のメカニズムをつくり出し、世界的インフレーションを進行させ、更に国家資本輸出—商品輸出—利潤生み資本輸出へと転じ、新たな世界の再分割が開始されたことを意味している。だがこのことは、このメカニズムにとつて不可欠の機構たる国際通貨体制を対立し、それを危機に陥し入れることによつて、一方では再分割戦を一層激化させ、市場を相対的に縮小させ、他方ではインフレーションの進行によつて国独資政策を破綻させる。かくして帝国主義諸列強は、益々過剰となる資本の処理を軍事投資—軍事経済へと転化し、産軍複合体をつくり出し、過剰労働力を確保するために統制経済へと移行し、原料資源—商品市場—低賃金労働力の獲得のために、後進国への国家資本輸出—商品輸出—利潤生み資本輸出を激化させ、その独占的確保の闘争を激化させる。これらに新たなエネルギー革命と技術革新が一層拍車をかける。

そして行きつく先きは戦争である。戦争によつて価値破壊と過剰労働力の破

他方国際反革命同盟—帝国主義列強間の国際的政治的軍事的体系は今日の戦争の性格と再分割戦を反映して一方では内乱への出動から、後進国への武力干渉、そして局部的な侵略反革命戦争、更に「労働者国家」との全面戦争のために通常兵器、通常軍から核兵器とその運搬手段に至る迄、ありとあらゆる戦争に對応しうる系統的な手段として再編され、他方ではこの特別の国際的政治的軍事的手段の争奪戦—主導権をめぐって再編され、その再編が次の戦争への新たな序曲として、各国のなし崩しファシズムへの推転を促進し、国際的な政治的危機を激化させる。

統制して現代帝国主義の全世界的矛盾の成熟は

総制経済—再分割戦—侵略反革命戦争—なし崩しファシズム

軍事経済—再分割戦—侵略反革命戦争—反革命同盟再編

上記の経済的政治的構造へと転化しはじめており、その将来の延長に反革命帝国主義世界戦争を測定しうるものとして進んでいる。「前段階決戦」の時期が始まっている。

現代帝国主義のこの全世界的矛盾の成熟と新たな展開は過渡期世界を根底から揺さぶることを意味している。何故なら世界の総力戦の時代を迎えたことを意味している。何故なら世界の総力戦の時代をつくり出されつつあるからであり、更にそれは三プロットのプロレタリア人民を単一の戦争に引き込み、三プロットの個別的、過渡性では対応しえないものとして、従つてその解体と敗北かその止揚、統合かを不断に迫るからである。現に三プロットの階級闘争はただ個別的なものとしてあるのではなく、その内部に世界性を不断に内包するものとしてある。「労働者国家」では帝国主義の侵略反革命と闘争が、同時に自からの団結の質と形態の止揚を獲得する闘いとして、後進国では民族ブルジョアジーと帝国主義との闘争の二重性—内と外に於ける闘いとして、帝国主義国では、自国権力と国際反革命同盟との同時一体的な闘いである。更にその社会性は帝国主義の全世界にわたる系統的なインフレーションと統制経済による二重の収奪と軍隊と失業をめぐって普遍的に与えられ、暴力性は世界的な革命と反革命の対決点が軍事—戦争の形態をとる（「労働者国家」の存在）が故に、そして帝国主義の支配の環が軍隊となるが故に、自らをどのような軍隊へと組織するかが不断に問われることによつ

て軍事の問題へと発展する。

だから要求されているのは、この世界性・社会性・軍事性を単一の戦線へと統合すること、それが世界赤軍―世界革命戦線であり、その指下として世界党をつくり出さねばならない。そしてこの戦線は帝国主義諸列強の軍隊・NATO・安保の軍隊との世界的戦闘と解体へとその総力を結集してゆかねばならない。その条件は成熟し、不可避的につまづいていくのだ。

②何から始めなければならないか。
世界階級闘争は今何を要求しているのか。後進国革命戦争は転機を迎えている。ベトナム臨時革命政府は一国政府として完結するのか、国際的司令部へ発展するのか、O.L.A.Sは帝国主義の転換の下で、どのように米大陸全体の戦争に総力戦を開始するのか、対ソ協調は時間かせぎなのか、革命の敗北なの

か。そして中近東に於けるパレスチナ解放統一機構は、同時にアラブ解放戦線へ発展し、帝国主義と同時にそれと癒着した地主・民族ブルジョアジー・王侯を打倒する闘いへと至るのか、どうか。「労働者国家」はもつと鋭く深く深い戦機を迎えている。帝国主義世界秩序の巨大な変更がNATO・安保再編―なし崩しファシズムとして展開し、それが新たな侵略反革命戦争の序曲であり、この戦争が巨大で、世界的であり、「労働者国家」をまきこまざるにはおかないこと(反革命戦争)。このことに対して「労働者国家」プロレタリアートは対抗を迫られていく。だがこの対抗闘いは自らの国家として固定された存在形態を克服、止揚し、世界プロレタリアートの発展を要求する。だがソ連とそれによって支えられているスターリン主義官僚独裁はそれを抑圧し、国家とその連合体制として保持しようとするが故に、「労働者国家」間の武力衝突をつくり出し、それによって総力戦体制を準備する。ソ連は米ソ同盟、対西独・中国封じ込めを軸として、軍部を中心とする指導権の再編を遂行した。中国は文化革命―九全大会をもって対米ソ正面作戦を、持久消耗戦略に人民戦争で遂行する体制を、党―軍―国家機関、大衆の構造でつくり上げた。そして中ソ衝突が続く限り東欧の動揺、チエコ闘争も続く。更に北朝鮮、北ベトナムの統一の要求……。

これらの転換をつくり出しているものこそ帝国主義世界秩序の再編成―新たなが故に、なし崩しファシズムの一潮流として社会帝国主義―社会ファシズムへと転化した。レーニン修正主義―スターリン主義はかつての社民の位置に、人民戦線のブルジョアの反革命へと転落し始めている。それと共に反スタ共産主義運動も決裂を問われ、分裂を開始し、不可避的にそのテンポが速まっている。帝国主義ではレーニン主義の戦略戦術、党形成―階級形成の歴史的境界とそれを越えて成熟し指導の飛躍を要求するプロレタリアートの自然発生性に対して、①その自然発生性に拮抗してレーニン主義の解体へと直線的に進む解党主義―現代アナルコサンディカリズムと、②その自然発生性に敵対し、それと結合、止揚すべき世界革命戦争の時代に於ける目的意識的実践の追求を否定し、レーニン主義の歴史的境界を固定化して自己を維持しようとする中央派―新スターリン主義の傾向を世界革命戦争を口先では承認するが、実践的には敵対する傾向、③レーニン主義の発展止揚を世界赤軍―世界革命戦線として追求し、世界革命戦争の戦略戦術の獲得をめざし、党に於ける指導の目的意識的環を党と軍事―軍事を組織し、獲得すると同時に、軍事をこえ統御しうる党の指導性として設定し、自然発生性との結合―止揚を前段階蜂起―世界革命戦争として実践的に開始し、党―革命戦線へと形成しようとする我々への分裂である。④の中央派―新スターリン主義の傾向との闘争こそ今日の党形成―党派闘争の主要な問題である。何故なら世界革命戦争を実践的に切り開きうるか否かはこの分岐点をもっているからである。「労働者国家」では、世界革命戦争を新スターリン主義―根拠地論へ世界党の解消である。今、中国とキューバがその試練にたっている。それを止揚しうるのは帝国主義国における前段階蜂起の世界性である。我々は前段階蜂起の世界性を、世界革命戦線協議会へとまずもって組織化し、世界党への第一歩を開始しなければならぬ。

な侵略反革命戦争の序曲にNATO・安保再編―なし崩しファシズムに他ならない。それは同時に帝国主義階級闘争にも不可避的転換を要求している。世界革命戦争を闘いとする問題は、何よりも、この帝国主義階級闘争の不可避的転換が、どの様に質として獲得されるにかかっている。我々はそれを世界革命戦争―自国帝国主義打倒を開始する前段階武装蜂起と規定する。この前段階武装蜂起の実現とそれを通してのベゲモニーが世界革命戦争を開始させるのである。秋の前段階蜂起は帝国主義のなし崩しファシズム―侵略反革命戦争―三プロレタリアートの解体から世界戦争への開始に對し、それを逆にプロレタリアートの自国帝打倒を結節点とした世界的な全人民の武装―帝國軍隊の世界的解体へと切り開き、統合していく、その物質力を獲得していく、新たな地点―橋頭堡として獲得されねばならない。

この時点を迎えて、政治潮流の世界的分解と再編は不可避となった。かつて帝国主義段階への突入と共に、第二インターからベルンシュタイン修正主義派が発生し、帝国主義の世界的矛盾の成熟―第一次大戦と共に、それが社会排外主義へと転化した時、同時に第二インターは、それを止揚したレーニン主義―武装蜂起を組織する前衛党と革命的内乱主義―プロレタリア革命派とカウツキー―中央派―帝国主義への小ブル反対派―帝国主義戦争への口先での反対と実践的承認―社会排外主義への接近―転落と、その左翼中間的動揺―トロツキー―ローザへと分裂し、レーニン主義はロシア革命によって第三インターへと発展した。

以降、過渡期世界の成熟とともに社民は帝国主義との恒常的同盟―一構成要素へと転化し、レーニン主義の修正派―スターリン主義を過渡期世界―現代帝国主義の補完者として生み落とす、マルクス、レーニン主義は反スタ共産主義運動を形成し、受けつがれた。そしてその発展止揚が共産主義者同盟を普遍的形態とし、ゲバラ―カストロ、毛沢東を地方的形態として成熟してきたのである。だが今日、過渡期世界―現代帝国主義の全世界的矛盾が成熟し、世界革命戦争が実践的課題として登場する時、社民―帝国主義労働運動派は、現代帝国主義国家によって買収され、その一構成要素として、ここに存在基盤をもっている。

共産主義者同盟赤軍派
政治理論機関誌

赤 軍 No. 4

発 行 11月7日

価 格 300円

連絡先 TEL (03) 907-2487